



## 目次

### ■特集

国際シンポジウム『新・ミュージアムの時代～ミュージアム都市へのシナリオ～』開催される！！

／ JMMA 事務局 近畿支部 ..... 2

ミュージアムは「街創り」の必須ツール！

～地味だが、息の長い繁栄持続型の街創りに欠かせないミュージアムカルチャー～

／ 神戸プラトン装飾美術館 三浦 明定 ..... 7

北斎の町・小布施

／ 小布施堂 市村 次夫 ..... 11

ヘリテージ・ミュージアム都市への序曲

／ 新居浜市 森賀 盾雄 ..... 12

### ■論考・提言・実践報告

会話採取調査とその周辺の問題について

／ 北海道大学 佐々木 亨 ..... 16

### ■時の話題

琵琶湖博物館の新しい取り組み

／ 滋賀県立琵琶湖博物館 芦谷 美奈子 ..... 20

### ■研究部会活動報告

制度問題研究部会

／ 国立科学博物館 小川 義和 ..... 22

教育・コミュニケーション研究部会

／ (財) 科学技術広報財団 倉本 昌昭 ..... 24

### ■支部会だより

北海道支部設立幹事会を終えて

／ 小樽市博物館 土屋 周三 ..... 25

東北支部会発足にあたって

／ 前沢町立牛の博物館 兼松 重任 ..... 25

### ■新刊紹介

「ミュージアムショップへ行こう！そのジャーナリスティック紀行」

／ 佐々 恵一 ..... 27

### ■インフォメーション

..... 28

## 特 集

### 国際シンポジウム

『新・ミュージアムの時代～ミュージアム都市へのシナリオ～』開催される！！

JMMA 事務局  
近畿支部

去る、5月27日、28日の両日、当学会と（社）関西経済連合会及び（財）21世紀協会の主催で、200名を超える参加者を迎え、大阪国際会議場を主会場として、英国からのデビッド・アンダーソン氏の他、多摩大学のグレゴリー・クラーク学長や多摩大学教授で都市プロデューサーの望月照彦氏、大阪市立大学の橋爪紳也助教授、あるいは、神戸北野町の三浦明定さん、新居浜市役所観光商工課長の森賀盾雄さん、小布施の市村次夫さんなどの出席を得ながら、国際シンポジウム『新・ミュージアムの時代～ミュージアム都市へのシナリオ～』が開催された。

#### シンポジウムの概要—熱心な聴衆とともに ミュージアムに対する多彩な役割を実感

27日の第1セッションでは、講演とディスカッション、第2セッションではミュージアム・フォーラムでの情報交換会を、翌日の28日は、会場を近畿各県に5コースを設定して、ケーススタディー&ワークショップが行われた。

本シンポジウムは、24日から27日にかけて開催された「関西ミュージアムメッセ2000」の交流事業としても取り上げられ、同会議場の5階で行われた展示場とともに、午前10時の開始から一日中、活発な意見交換や交流が行われ、第2日目のケーススタディー&ワークショップとともに、盛会な国際シンポジウムとなった。

本学会として、このような大会を東京以外で開催するのも初めての試みではあったが、今年度から発足した支部組織の拡充というねらいとともに、西日本地区会員に対する学習・交流機会の提供という意味も含めて開催された。

準備不足な点は、多々あったものの、会員及び関係各位の御協力や御助力もあり、別掲で見るアンケート結果では、回答者の約85%から参加した事で得たものが「すごくあった」や「あった」という結果を得、当初のねらい通りの成果を得る事が出来た。

このシンポジウムの開催によって、この種の行事を東京地区以外で行う事の意義と、文化の時代といわれている通り、会員も含めた一般の方々のニーズの多さと、行事内容の質への希求やミュージアムに対する期待の大きさを実感させられた。

この稿では、主催者側を代表して行われたシンポジウム運営委員長の津田和明氏の開会挨拶のあとに行われた記念講演と、学会を代表しての大堀会長の挨拶の後

に行われた、英国アンダーソン氏による特別講演やプレゼンテーション、並びにクリエイティブ・ディスカッションの様子など、第1セッションを中心にしてシンポジウムの概略を御紹介します。

#### ■記念講演（要旨）

演題：地域から発進するミュージアム文化と日本の国際戦略  
多摩大学学長 グレゴリー・クラーク氏

#### 製造業からサービス産業への転換と ライフスタイルの確立

本日は、コミュニティの活性化とミュージアムの役割という視点から、経済と社会、そして国際化に対する我が国の現状とその問題点や原因等を述べたい。

これからの我が国の経済や社会の発展、国際化については、個人のライフスタイルの確立とともに、地域コミュニティの形成が必要であり、その中から次代を担う人材が育ってくる。そこにこれからのミュージアムが果たすべき役割がある。

我が国のこれまでの発展が、ものづくり、製造業中心の発展であり、これからは、サービス産業への転換の必要性がある。しかし、時代のニーズが変化したにもかかわらず、「製造即ち美德」とあるという風潮が今もついでおり、サービス産業が軽視されてきた。

また、現在の不況の原因といわれているバブル経済や政治の問題は、二次的・三次的な問題であり、事の本質は構造的に第三次産業に移行しなければならない時期にきており、ライフスタイル転換の必要性和、特に男性の持っている職場に属する事に対するアイデンティティの転換や、サービス産業を発展させる必要がある。

そこで、個人のライフスタイルの転換という観点から、美しいもの、自然や美術、芸術に接するといった、生活を楽しむためにも、ミュージアムは大いに果たす役割があり、公共事業に対しても、道路や農道空港などではなく、都市型公共事業と文化的な生活の為の公共事業が必要であると考えている。

#### 地域コミュニティ形成の重要性和 ミュージアムの役割

経済だけの視点からではなく、社会発展の為にコミュニティづくりの問題を考える必要がある。

人は本能的に人間関係を求めるが、今の日本は、核家族が象徴している様に、その人間関係が崩壊してしまっている。最近の少年犯罪の問題や、所謂、会社人間的な日本独自の集団主義、共同体意識の問題も存在している。

今の若者の創造性のなさや無気力さは、社会全体が造ってしまった学歴社会によって、コミュニティへ出ない、狭い箱の様な中で育った若者をつくり、仲間同士の様な小集団社会でないとコミュニケーションできない状況を生み、マスメディアからの一方的な悪影響



シンポジウムで講演する  
グレゴリー・クラーク氏

時から社会的なコミュニティー（例えば、ボーイスカウトやボランティア、教会など）の中で育てられていないという日本の社会状況がある。コミュニティー形成についても、ミュージアムの果たす役割は大きく、若者に対して、コミュニティーに出て、大いに文化活動への参加を促したいし、その受け入れや、参加促進の為の活動が必要である。

教育についても、今のゆとりの教育は、ゆとりのない教育になっているし、受験戦争や学歴社会の為の教育になっている。創造性を育むのは強制的な教育ではなく、社会全体であり、自由に社会へ出れば、自然に子ども達の中に自然な形で創造性が育まれるのであり、芸術や中身のある充実したものに触れさせる事によって、自動的に創造性が育まれる。

この視点にこそ、ミュージアムの大いなる役割があるし、コミュニティーを形成する事は重要であり、ミュージアムの果たす役割は大きい。

## 国際化とミュージアムの役割

最後に、国際化の問題については、我が国への外国人観光客の多くが、奈良、京都、鎌倉といった伝統的な所に偏っている。

文化交流にしても、いまだに、歌舞伎や生け花であり、現在の日本を理解してもらうという本来的な目的にはなっていない。真に国際化、あるいは日本の文化を理解してもらおうと思ったら、もっと、一般の人達や日常生活と接する機会を造る方が良い。そうすれば、日本人の心の優しさや親切心、責任感の強さといった、特質を理解してもらえるのであり、文化交流は、人的交流から行くとよい。

反面、今の日本人は、外国人に対して排他的であり、差別的であり、「場（赤ちょうちんのような）」の中に入ればすぐに親しくなれる文化である。

そこで、このような交流の場の一つとしてミュージアムがあるし、もっと、外国人がミュージアムを利用する工夫や観覧できる機会をつくるべきである。

職員自らが来館された外国人と積極的に交流を図る事、特に、アジアの近隣諸国との交流、心の交流を図るべきであり、そのためにも職員の語学力の向上を望みたい。

を受けてしまっている事によるものである。一方、大人、特に男性社会の問題は、自らの価値判断ではなく、周りの雰囲気動くというこれまでの日本人の特質によるものである。

どちらの問題にしても、大きくいえば、道德の問題であり、子どもの

## ■特別講演（要旨）

演題：英国の挑戦～ミュージアムがつくる知の成長社会～  
ヴィクトリア&アルバート美術館  
教育部長 デヴィッド・アンダーソン氏

### ミュージアムは地域や社会に対して働きかけを

今、我々は、教育と文化が密接につながった文化的な革命の時代に生きており、情報化社会と言うよりは、学習社会が必要な時代である。

ミュージアムにある展示物をどう使えばよいのか分かっていなければ意味がない。文化は、我々の中にあるのであって、展示物の中にあるのではない。ミュージアムの仕事、目的は文化の発展にあるのであって、"もの"というのは手段に過ぎない。

文化的市民権という言葉があるが、これは、単に見るという事ではなくて、参加する事を意味している。ミュージアムは、見る機会を与えているが、本当の意味で参加する機会を与えているだろうか。これが、今、全世界のミュージアムが抱えている問題である。

我々の主たる目的は、集め、保存し、研究し、展示するためだけの役割と考えていて、社会に対する影響力を考えていなかった。

我々が果たす教育面で重要なのは、ミュージアムの活動によって我々の生活を改善するのだという希望であり、そして、文化というものを使って、クリエイティビティーを学び、喜びを学ぶ事である。

こういった収蔵品があるのかという事が、そのミュージアムの成否を決めるのではない。

### 学習経済とミュージアム

知識というのは一つの分野に頼るのではなく、学際的な経験から生まれる。ミュージアムこそ、その様な経験の場になるべきだ。英国の哲学者、マイケル・オブショットによれば、感じ、考える能力を獲得する事であるといっている。ある企業家のひとは、ほとんどの仕事は人々を通じて、あるいは人々と一緒に行う事であると言っている。それが学習であると言っている。芸術、美術を通じて学ぶ事もある。

人々がどこで学習するのかと言う事を聞いてみると学校教育よりも文化的な場で学んでいる。ミュージアムもその一つである。



シンポジウムで講演する  
デビット・アンダーソン氏

文化的な場を使う事を促す必要はなく、価値ある学習の経験ができるかどうかミュージアムの課題である。ミュージアムは、社会に対して、本物を通じて学ぶ場を提供できる。非物質的な文化に関わる神

話であるとか物語り、概念、知識そして展示物、これもまた全て包含した形で本物を提供するところである。事実ではなく、経験を学ぶ場である。また、学校教育と社会との橋渡しがミュージアムである。

### クリエイティブ・インダストリーとしての ミュージアムとコミュニティの再生

これからの経済発展のカギは、クリエイティブティであり、21世紀の経済をきめるだろう。

今までミュージアムは、コミュニティの再生には役立たないと考えられていた。建物を建てるという方法は、一時的には雇用を確保するに過ぎない。

地域社会にとって、ミュージアムすなわち文化がなければ、イースト菌がなければケーキが出来ない様に、文化活動やアート、ミュージアムがなければ、コミュニティのバイタリティーはでない。

地元住民の参加によって、アイデンティティーが生まれ、自尊心が育まれる。また、地元とのパートナーシップが生まれる。

今は、参加型のアートのプロジェクトをやる方が効果的である。お金がかからないし、フレンドリーな関係が作れる。マイノリティーの不利な人達へのサポートの必要性がプロジェクトにはある。

我々の収蔵品をコントロールするのではなく、見る人がいろいろな形で解釈できる様になるべきである。ミュージアムは、コンテンツを持っているから価値があるし政府がお金を出す。

地域にあるミュージアムは地元のネットワークづくりや、地元のリソースをつなぐ役割がある。

アクセスと学習参加の機会、社会的な統合あるいは、来れない人が来れる様にする工夫が必要であり、クリエイティブな産業としての役割、コミュニティへのサポートが求められている。

### ミュージアムでの様々な学習

インフォーマルな学習、家族や友達を通じた学習等がミュージアムにはある。子どもの時にインフォーマルな学習がうまく行かなければ、学校教育もうまく行かないといわれている。

セルフリレーティッドラーニング自分で目標を決めて学習するという方法もある。

これは、課題があると、自分がやりたいというものを追い求めるし、フォーマルエデュケーションという、先生が学習目標を決めていく方法も欠かせない。それに世代を超えた学習がある。文化を超えた学習がある。

また反対に、来館者が何を感じるのか何を欲しているのかをリサーチし、次に活かす事が重要である

### 利用者参加プログラムとコミュニティ再生

デザイナーの参加を得たプログラムや、生徒自らのファッションウォークの催物、あるいは、学生を対象に

して、コレクションからインスピレーションを得たファッションショーを行ったり、写真の展覧会を行った。ミュージアムのコレクションを使って、誰でも参加できる催物も行った。

また、地域の子ども達が考えたプロジェクトニュースレターや、中国系のスタッフによる中国系コミュニティ向けのプロジェクト、南アジア系コミュニティ向けのプロジェクト、あるいは、ほとんどミュージアムにきた事がなかった女性に頼んできてもらい、タージ・マハールの写真をみて王妃の姿の写真からインスピレーションを受けて、王妃のイメージをつくるプロジェクトなども行った。

デジタルカメラを借り、新しいデザインのポスターをつくるプロジェクトには、2週間で3000人もの参加者を得て、それぞれがポスターをつくるという事もした。

今、V&Aでは、未来のすばらしさやプロセスのすばらしさを定義しようとしている。また、学習のすばらしさ、経験のすばらしさを定義しようとしている。

未来のミュージアムは、大きな建物の様な規模ではなくて、このようなコミュニティとかかわりながら活動をしているところになる。

### ミュージアムコンセプトの拡大とパラダイムの変化

もう、巨大な恐竜の様なミュージアムは死に絶えた。我々がやっている、地域コミュニティとの関係性の中で活動しているのが将来のミュージアムだ。

ミュージアムのパラダイムは、情報から経験へとシフトしている。また、何々をしるという関係性から、自分達で学ぶという方向に変わるし、学習のすばらしさを学んでもらうスペース、美しいスペース、自分達のやりたい事ができるスペース、あるいは、プロではなく普通の人々が求めている事ができるミュージアムが必要である。

ミュージアムは、生涯学習の中心になるべきであり、21世紀における教育のセンターになる。学習は黄金のカギであり、それを使う事によって、コミュニティを活性化できるし、学校の様なところで使う予算よりもコストパフォーマンスは良い。

また、入館者の声に耳を傾けるべきだし、何を提供できるかを考えるべきだ。

新しい時代には、あたらしい制度が必要であり、クリエイティブティが必要だ。企業家精神や新しいパートナーシップが必要だし、ネットワーキングも必要である。

文化的な活動に対するサポートであれ、社会参画を促すのであれ、建物に依存するのではなく、どのような社会が必要で、どの様なミュージアムが必要かを考えるべきだ。

社会の目的にあったミュージアムづくりや、それをどう使うかといった事からの発想が必要である。感じ方、考え方や経験を促してゆく事が目的となるだろう。

企業が生産の場から、思考の場になった様に、ミュージアムにも新しい役割がある。

ミュージアムは、過去の管理人、保護者であるといったのは過去のものになった。これからは、将来に向けての親であり、保護者になるべきである。

## ■プレゼンテーション (要旨)

「地球社会の次世代モデルミュージアム産業都市・大阪」  
都市プロデューサー 望月 照彦  
日本ミュージアム・マネジメント学会近畿支部

このプレゼンテーションでは、大阪を取り巻く、兵庫、京都、奈良、三重、和歌山といった様々な文化圏をまとまりと考える事によって、一つのミュージアムに見立てる事ができ、関西圏が、大阪を中心とした地域の知のハブセンターになり、大学とのネットワークや、コミュニティのサポート等の活動を通じて、地域が活性化し、経済発展のパネになってゆくのではないかな。その事によって、ミュージアムは、もっと、地域に浸透して、社会化してゆくだろうと語られた。

詳しい内容については、望月先生がお話の中で使われた概念図も含めながら、改めて、望月先生と近畿支部との連名で、次の会報で御紹介したいと思います。

## ■クリエイティブ・ディスカッション (要旨)

コメンテーター: 筑波技術短期大学副学長 沖古 和祐  
大阪市立大学助教授 橋爪 紳也  
都市プロデューサー 望月 照彦  
V&A美術館教育部長

デヴィッド・アンダーソン

知のキュレーター: 神戸北野異人館 (有) プリンスコート代表  
三浦 明定

ミュージアムのまち小布施 小布施堂社長  
市村 次夫

銅のテクノミュージアムタウン新居浜  
新居浜市商工観光課長 森賀 盾雄

コーディネーター: 常磐大学コミュニティ振興学部専任講師  
塚原 正彦

司会: 作家・タレント 飯星 景子

未来に向けたコミュニティづくりをしている3名の「知のキュレーター」の方々に、それぞれの地域全体をミュージアム化している実践内容について、これまでの経緯や将来的な方向も含めて発表して頂き、その後、コメンテーターも含めた形で、議論を深めていった。

3名の方々には、別稿で、それぞれの活動について御紹介頂いていますので、ここでは、ディスカッションの内容を中心に御紹介します。

先に、知のキュレーターの3名の方々により事例発表があり、それを受けた形で、以後ディスカッションが始まった。

最初に、事例報告の全体をまとめるという形で、沖古氏より発言があり、「これからの博物館施設に於ては、ロビーやミュージアムショップ、トイレや通路、あるいは、アクセスも含めた周辺の環境を考えてゆく必要があるし、それぞれ個別の博物館を考えながらミュージアム化してゆく事になるのではないかな。学会でも例えば、学校をミュージアムに、ホテルをミュージアムに駅をミュージアムにといった地域にあるものを活かし、組み合わせてミュージアムにしていこうと考えている。

「木を買わずに山を買え」という宮大工の言い伝えの様に、地域の特色を集めてミュージアムを考えていけば良いし、ネットワークやリレーションシップも今後ますます大切になるだろう。」という話があり、続いて橋爪氏は、「新しいミュージアムのあり方は、運動体が先にあり、ミュージアムという施設ができるというこれまでの考え方ではない、新しい考え方が必要である。柔軟に変わってゆくミュージアムの姿をイメージする必要があるし、近代以後の施設に対する考え方を変える必要がある。

また、ハイブリッドな施設のあり方やソフトの重要性、あるいは、時代をこえる核となり得るミュージアムの役割が考えられる。」と発言された。

アンダーソン氏は、日本の事例について、良いモデルであり非常に刺激的で、コミュニティが変化の基盤を成しているという良い例であり、英国との違いを、市民のイニシアティブがでていところであると評した上で、「英国では自治体に頼っているのが現状である事を述べ、非常に多彩な取り組みがなされていると感想を述べられ、教育、あるいはトレーニングが必要であり何らかの形でスキルを身に付けさせる教育機関と制度が必要になる。サポートできる人材育成の必要性がある。」事を指摘された。

望月氏は、知のキュレーターといった地域の中でのコーディネーター、あるいはエディターといった役割の人材が各地に現われてきた事を評価し、「他にもこのような事例が現われている。今までは目に見えるものをもっと良く見せるためのミュージアムだったが、これからは、目に見えないものを見せるミュージアム、地域とのリレーションシップとしてみせてくれるミュージアムがこれからのミュージアムではないかな。3人の事例は、地域の文化や知恵をいろいろな形で見せてくれている。それが、これからの発展のヒントになる。



地域の文化や暮らしぶりといった、その地域の脈を見せられるセンターがミュージアムになる。また3人の話から、コンテンツがないとだめである事、風土の魅力を提供する事、生活文化や暮らしぶりを伝える事によって、ミュージアムの地域化が大事である事が理解できる。」とまとめられた。

その後、3人の知のキュレーターから補足的な説明があり、今後の方向性や様々な工夫など、地域とのリレーションをすすめている事例が紹介された。

続けて、この3つの例以外に地域の個性を活かしている例はないかとのコーディネーターからの発言でアンダーソン氏から、「アイルランドのダブリンでの高齢者向けの学習プログラムによる参加者が、そのままコミュニティでの解説員になっている例や、スコットランドのグラスゴーの例では、使われなくなった鉄道施設を使って、住民自らが、コミュニティセンターをつくり、インフォーマルなコミュニティが小さなミュージアムを生んだ」という紹介があった。

また、橋爪氏は、ヒューストンでの多民族のフェスティバルは、学校教育のプログラムにもなっている事を例にとり、「日本でも、京都に祇園祭があり、大阪に天神祭りがある様に、生活の中にこそミュージアムになる要素が潜んでいる」事を指摘された。

望月氏からも、墨田区の運動を紹介された後、「松山も生活博物館という蔵をつかったミュージアム活動があるし、岡山では、記憶のミュージアム運動などもある」事を述べられた。

最後に、沖古氏からは、これからは活動が中心になってくる事や、地域の核になっていく事があるが、「基本的には、住民全体の支持が必要であるとともに、人材の問題を考えないといけない事、あるいは、生涯学習という面からは、高齢者の経験を活かす工夫も必要である」という指摘があった。

その後、コーディネーターの塚原氏からも、双海町の夕日のミュージアムについての紹介に続き、リピーターの問題について、3名の「知のキュレーター」から、発言があり、それらも含めた形で沖古氏からは、これからのミュージアムについて、「地域や他の施設との連携、知を選択できるミュージアム、知を共有するミュージアム」などが考えられる事や、「生涯学習の中核としてのミュージアムは、いかに学習してもらうか、いかに楽しんでもらうかなど、楽しく学習してもらうという意識」がリピーターにつながるという指摘があり、「生涯学習の中核になってゆくミュージアム、研究の核になってゆくミュージアム、知を創造するミュージアム」になる必要性が指摘され、今後の社会が、ミュージアム社会になるのではないかという予想もされた。

また、望月氏は、「行政、企業、市民、NPOといったABCDパートナーシップが大切である」と述べられると共に、地域のコーディネーターとしての知のキュレーターの役割や、「ミュージアムソサィティ」というものを市民が理解するかどうか、ミュージアム都市の成否がかかっている事と、日常的なミュージアム・ライフ

スタイルといった事の定着が必要であり、日常的な距離で、ミュージアムを捉えたい」と述べられた。

次に、橋爪氏は、「これからは、各地の競争時代になるのではない、違うものをつくっていかねければ」という指摘とともに、「町づくりの観点からは、ミュージアムだけではなくて、他の施設やセクションとの連携が必要になる。都市の重層性が必要である」といった発言があった。

最後に沖古氏からは、「テレビというマスメディア、ミュージアムとしてのテレビ」という視点と、それが、リピーターを生むという指摘があり、コーディネーターの塚原氏からは、「若者文化からのミュージアムの出現の可能性」といった指摘、そして、アンダーソン氏からは、「若い時からミュージアムを利用するという経験が必要である事、ミュージアムの役割は、人々の為に変化を可能にすることであり、社会の中の触媒である」という発言で、ディスカッションが閉じられた。

また、司会の飯星さんからは、利用者サイドからの意見を代表する形で、ミュージアムへの期待として、「物語性や記念写真などの場所、あるいは知的満足感とともに、個性的なリレーションの方法を握ったところが愛されるミュージアムになる様に感じる」という発言があった。

最後に、このディスカッションの総括として、コーディネーターの塚原氏から、「今後は、リレーションシップのスキルをどうつくるのか、どう楽しむ方法をつくるのか。また、人が出会い、何かをやり、それを作り上げてゆくサポートをするのが、これからのミュージアムの役割ではないか」という言葉で、ディスカッションは、締めくくられた。

## ■アンケート結果について（概括）

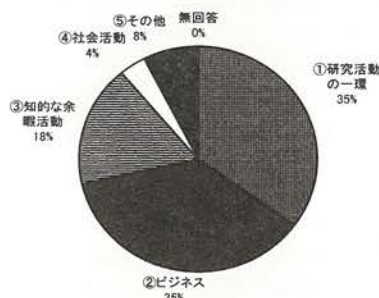
本シンポジウムの開催にあたって、参加者へのアンケートを行いました。ここでは、その一部を概括する形で御紹介します。

参加者総数200名強の参加者に対して回答者数は62名で、今回は、研究活動やビジネスとして参加されたのが、合わせて68%あり、回答者の84%の人達が参加して得るものがあつたと回答され、参加動機としては、シンポジウムのテーマに魅力を感じたと述べられていた。

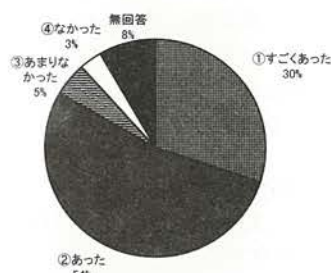
その他、回答者自身の課題との関連から、割合はつきりとした問題意識をもった方が参加されている様である。

なお、運営方法や内容が豊富であったと感じられた反面、プログラム編成や開催時間、あるいはスタッフの運営についての要望なども寄せられていた。総括して感じた事は、今回の様なテーマのシンポジウムに対する要望は、今後ますます増えてくる様に感じられるとともに、地域づくりとミュージアムとの関連など、より地域との関連からみたミュージアム・マネジメントに対する学会活動への期待が高まっている事を感じた。

・この催しへの参加は、あなたにとって何ですか？



・この催しに参加したことで、得るものがありましたか？



#### アンケートのおおくり

本日は、国際シンポジウム「新・ミュージアムの時代」にご来場を賜り、誠にありがとうございます。  
今後の参考にさせていただきたいので、アンケートにご協力をお願い申し上げます。

- この催しは、何でお知りになりましたか。(複数回答可)  
①チラシ(どちらで) ②新聞・雑誌(どちらの) ③友人・知人 ④ダイレクト・メール(どちらからの) ⑤その他( )
- この催しへの参加はあなたにとって何ですか？  
①研究活動の一端 ②ビジネス ③知的な余暇活動 ④社会活動 ⑤その他( )
- この催しへの参加を動機付けた最大の要因は何ですか？  
①テーマ ②講師、出演者 ③主催者 ④場所や会場 ⑤その他( )
- 現在、あなたが抱えている課題は何ですか(2つまで回答可)  
①これからのミュージアムのあり方の模索 ②街づくり・村おこし・地域活性化 ③学習環境の充実 ④ニュービジネスの発想 ⑤NPO等の市民活動の振興 ⑥地域資源・文化資源の有効活用 ⑦文化振興 ⑧その他( )
- この催しに参加したことで、得るものがありましたか？  
①すごくあった ②あった ③あまりなかった ④なかった

なにを？

- 参加費についてお聞かせください。  
第1セッション ①高い ②妥当 ③安い  
第2セッション ①高い ②妥当 ③安い  
第3セッション ①高い ②妥当 ③安い
- 開催日時については、いかがでしたか？  
曜日 ①平日 ②土曜日 ③日曜・祝日  
時間 ①午前 ②午後 ③夕刻以降
- このような催しに最も何を期待しますか？  
①学術的理論 ②具体的なノウハウ ③事例等の最新情報 ④エンターテインメント ⑤その他( )
- ご意見・ご感想をお聞かせください。

お返しを兼ね、あなたのことを教えてください。

- 性別 男・女
- 年齢 10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上
- 住所 大阪市内・その他大阪府内( )・大阪府外( )

ご協力ありがとうございました。

国際シンポジウム当日に配ったアンケート用紙

以上、第1セッションだけではありますが、長時間のシンポジウムをまとめるにあたり、かなり省いているところもあると思いますが、紙面の関係で、このような形になっている事を御了承下さい。

なお、第1セッションについては、全て、録音してありますので、今後、会員の皆様への活用方について、本部事務局ともども考えてゆきたいと思っております。

(文責： 近畿支部 榎井喜孝)

## ミュージアムは「街創り」の必須ツール！

～地味だが、息の長い繁栄持続型の街創りに  
欠かせないミュージアムカルチャー～

神戸プラトン装飾美術館  
三浦 明定

### 1. ミュージアムカルチャーは「街創り」の新スパイス

欧米の街を歩く時、必ず遭遇するのが「美術館」です。系統的に収集された美術品や世界の文化遺産が鑑賞できる公的な巨大美術館から小粋な私設美術館まで、大、小その数とユニークさには驚かされます。そこに足を運ぶ人の流れは近隣の商店やユニークなビジネスを育み、格調の高い街創りが進んでいます。ややもすれば「箱」創り型になってしまう日本の美術館づくりとは異なって、ミュージアムが「街創りの核や翼」の貴重なスパイスとして「衆」に最も身近な処で活用されている事例は、今後の日本の街創りに十分に活用できる、物売り以外にアーティストリックマインドを加味した新しく、息の長い街創りの「切り口」を示しているのではないのでしょうか？

1985年初夏、米国のバージニア州のウィリアムズバーグへ家族旅行をしました。異人館の保存と活用に何らかのスタディーになるのではと考え、漠然と同地を訪問したのでした。ロックフェラー氏の熱意で始まった植民地風の街の保存と再生は単にコロニアルスタイルの町並みを再現するのではなく、総督の館はホテルとレストランに、民家は宿泊施設に、「鍛冶屋」「薬局」「パン屋」など当時在った商店や施設は、当時の服装を着た働く人の姿までが再現され、そこで作られる物が販売され(鉄製のフェンスなど今も使えるもの)又、同地区の建物の修理用の部材や家具、調度品に至るまでがそこで生産されています。その様子は日本の妻籠や高山と異なって遙かに高度で大仕掛けでした。10ヘクタール強の街中は全て徒歩や馬車で回れるようになっており、ゾーンの外では一般車両が走り、近代ホテルが点在しているといったように、徹底した「ミュージアム街創り」が実施されていて英国のシェークスピアカントリー同様の集客になっています。昭和天皇も二度訪問され、G7のサミットも開催された処だけあってスケールと充実した内容は世界の文化財活用のお手本になっています。同所内に今も使われているロックフェラー家の別荘が在り、同夫人の個人的な「パッチワーク」の収藏品が、各部屋ごとに家具、調度品の中で展示公開されていると云うので、リッチマンの別荘を見たい物見高さもあって同邸見学し、その「パッチワーク」のコレクションと展示展開に驚嘆しました。この事が私共に今の装飾美術館の創設意欲を掻き立てたのです。以後取りつかれた様に世界の多くの私設(後、財団法人化した施設が多い)の小美術館を観て参りました。

### 2. IT'S TALK ITSELF!

YOU HAVE CHAMPAGNE EYES

多くの日本人が世界の隅々まで旅をして、有名美術館は申すまでもなく、世界の小さな美術館にも足を運び、種々の「美」



国際シンポジウムのディスカッションにて

への遭遇や実体験している事を頼もしく思うと共に驚きます。この事は多くの日本人の「本物」を見る眼が厳しくなって来ているという事でもあり、今後の美術館運営は今までと違って「鮮度ある変化」が集客上

必要になって来たことと考えます。知名度の高い作品鑑賞や著名な作者の展示館に出かける事も大切です。しかし世界には小さな美術館の中にもユニークで楽しい処も多数あるので、こういったところに出かけ、専門的な視点で美術鑑賞しなくても、素人なりに「美」のメモリーとノレッジを脳裏の奥に記憶することによって、美に対する教養を深めることができるのです。

長々とした説明文や評論文的な説明札は無用の欧米には「It's talk itself」や「You have champagne eyes」と言う表現があるように必要以上に大きな文書表示物は要らない、その代わりに確りしたカタログや深い知識を得られる専門書が売られている事が大事なことです。欧米のオークションのビューイングなどで何時も思う事で、まったくの私見で疑問に感じる事は、「画家」は本当に美術館に納める為に又それを目的として「絵」を描いたのであろうか？ということがあります。中世では王や領主などの富豪の依頼で描いた大作や、又中には市民がパトロンになって描いた大作（レンブラント作）例もありますが、中世、近代絵画の中には個人の「家庭」で楽しめる小作の絵画を多く見かけることがあります。著名な作家の作品は美術館の収集に任せ、マイナーな作家の美術品を集めて「楽しめる」アートコレクター（美術品蒐集家）の多く居る日本になって欲しいと考えます。私たち日本人の多くは絵や美術品を観る唯一のチャンスである新聞社や百貨店が催す〇〇展に慣れ親しんで来ましたが、アムステルダムやフランクフルトのように、街の画廊でリース（1回あたり¥2000程度の保険料で）で借りた絵などを自宅に持ち帰り家族で楽しむようなアートラバー（美術愛好家）が増える事で現存の美術館へ足を運ぶ人がより一層増える事を期待します。美術に関わる人や美意識を持った街創りを推進する方々がアートファンやアートラバーの予備軍の育成を身近なところから仕掛ける必然性が求められているような気がします。

### 3. 異人館の街、北野からのレポート（変遷編）



神戸 プラトン装飾美術館 《イタリア館》

#### 【1980年】

神戸市の文化財課より民間の「異人館」の保存と活用の相談を受けた私共は1年余りをかけ補強工事と明治時代に合わせた家具、調度品を英国で買い求め、イギリスのビクトリア時代とエドワリアン時代の不足した家財道具を輸入して館内を生き生きとした邸に変え、有料公開異人館「英国館」を開館しました。

#### 【1981年】

ポートピア81博覧会まえに開館、これまでの無料の公的な公開異人館のそばで有料にもかかわらず、大変多くの入館者があり、経営的にも高収入が得られました。この運営方法を地域の方に開示、多くの民間の異人館所有者が「〇〇館」と命名し、館を開館することになりました。（文化財保存の民活）★文化財を活用した「見せる異人館」が出現したのです。NHKドラマ「風見鶏」ブームで、それまでの観光客は年間50万人～80万人でしたが、それをさらに上回り、来街者は180万人と急増しました。ちなみに1970年初期では同地域の観光客は、0人に近い皆無と云った無名の観光地でした。

#### 【1990年】

1990年に入ると、それまでに「見せる異人館」から、一部「美術館」へと変身する異人館が出現し、1991年に「うろこ美術館」や「プラトン装飾美術館」が先兵となり、他の異人館を巻き込み「現在4館」の美術館志向の異人館が誕生しました。★この頃になると異人館ブームは去り、来街者も減り120万人～100万人と激減しました。我社は当時6館の異人館を運営し、年商も10億近くに推移しておりまして、10年余りで立派な会社経営に成っていました。

#### 【1995年】

阪神・淡路大震災に遭遇して、文化財である多くの「異人館」は、倒壊又は半壊。我社は運営異人館を1館のみ残して再開し、5館を売却。経営体質を身軽にして営業活動を再始動しました。（震災後）

#### 【1997年頃】

1997年頃になると社会の経済不況との「二重苦」に遭い、観光客の入れ込みも激減。運営健全化の為、異人館内に飲食店を併設する館が多くなり、プライダル用の会場や式場として変化して行きました。（バブル経済崩壊後）

#### 【1999年】

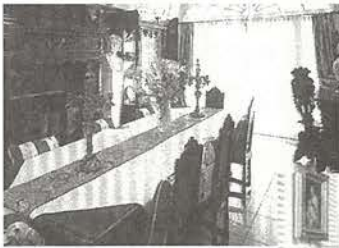
「使える異人館」を目指し、私が売却した「英国館」が夜間に本格的なパブを営業するようになり、私どものプラトン装飾美術館も軽食のイタリア料理を提供する事に本腰を入れたのでした。（海外の美術館にも併設例がある）

★この傾向は今後も続き、「見せる異人館」から「美術館」へと変わった文化財の活用は「使える異人館」へとただ今、変貌中なのです。

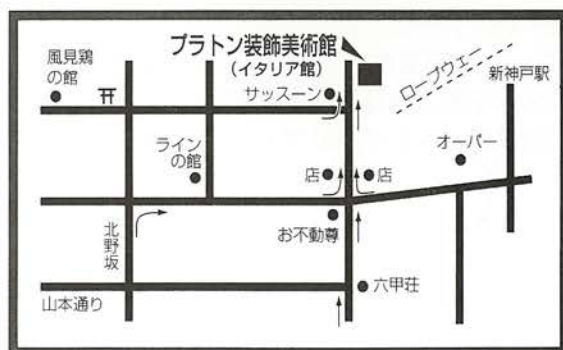
#### 【2000年】

現在は多くの公開異人館はジャンル分けした美術館へと展示内容を充実したり副業としてパーティーなどの「貸し会場」「夜間活用」などの二次活路を模索中です。集客力の弱い美術館営業の継続を副業的活用で営業持続に努力している現況は決して北野異人館だけの現象ではなく、今日の日本の地方都市の多くの美術館が抱えている問題点でもあるのではないのでしょうか？

## 【公開されている部屋】



## 【主な展示品】



〒650-0002 神戸市中央区北野町1丁目6-15  
TEL 078-271-3346 / FAX 078-221-2424

## 4. 私が訪れた現存する海外の有名私設美術館

(多くは創設後に財団法人化 又は公共に寄付したものである)

## 【米国】

## ーボストンー

## ・ガードナー美術館

イザベラ・ガードナー婦人のコレクションで自らの旅で収集した東洋美術品や欧州の宗教美術品、全欧州の古典絵画が多い。

## ーシカゴー

## ・ヘンリーフォード博物館

クラシックカー200台以上とフォード氏の収集品、工芸品、家具、機械。

## ーニューヨークー

## ・フリックコレクション

カーネギー氏同様フリック氏も鉄鋼材で富を築き趣味の良さでは評判が高い。ルネッサンス風の豪邸に家具と調度品とともにゴヤ、グレコ、レンブラント、ルノアールなど。世界の名画のコレクションで有名。

## ・カーネギーミュージアム

鉄鋼王のカーネギー氏の元の私邸を見せしている記念館。

## ーワシントンー

## ・ウィリアムズバーグ

バージニア州の植民地時代の街を学術的に再現した大規模な保存地区。アミューズメント手法の資金石。ロックフェラー氏による開発。家具、調度品、鍛冶屋、薬局、楽器屋、職人の街で当時の服装で仕事を見せる植民地時代を再現したコロニアルスタイルの街。同所内のロックフェラー氏夫人による「初期のアメリカのパッチワーク」のコレクションが見れる邸宅は有名で、今でも同氏が別荘として使っている。

## ーアトランタジョージアー

## ・スワンハウス

アトランタの郊外的美邸で私財で移築して個人が住んでいた館。とても美しい森の中に建てられたタリー・スミス氏の私邸で家具、調度品、絵画のコレクションが見れる。夜はレストランとして一部開放。

## ーマイアミーー

## ・ビスカイヤ邸

ビスケー湾マイアミに在る館で農機具王の息子が創設した邸。(米国主催の8国サミット会場にもなる美邸) イタリアルネッサンス調のジェームス・デアリング氏の私邸に欧州各国の家具、彫刻、絵画、庭園用の大理石のエクステリア彫刻品。4万平方メートル強の広さ。

## ・ヘンリー モリソン邸

マイアミのパームビーチに在って、かつて大統領の別荘としても使われた。1901年鉄道王ヘンリー・モリソン氏が妻に贈った私邸で現在では「ホワイトホール」と言うミュージアム。

・アールデコ様式の建築地区（マイアミ郊外）

マイアミ市南部の80ブロックの中に800軒のアールデコの建築が点在するので有名な街。

・ヘミングウェイの家

フロリダのキーウエストにある、作家ヘミングウェイの私邸。ネコと子孫が現在も住み、私邸を開放。

ーアメリカ西海岸ー

・ゲッツミュージアム

世界屈指の私設美術館。モービル石油の創始者ゲッツ氏の美術館で現代アートを含む絵画が中心。

・ハース城

シスコとロスの間接地に新聞王ハース氏によって創られた美術館。古典から現在までの美術品収集で有名。

・デ ヤング美術館

シスコの砂糖王スプルケルズの妻の収集品で知られている「白亜の館」の側にある美術館。アメリカ美術品とオリエンタル美術品のコレクションで有名。

【英国】

・チュジックハウス

ロンドン近郊の貴族の館。庭が広く、院内は古典絵画、家具、調度品などが展示されている。

・ウオーレス コレクション

18世紀に建造された美邸に世界有数の規模を誇る美術品のコレクションを展示。パリで長く住んだ4代目ウオーレス伯爵の個人収集品。マリーアントワネットの机、ルイ15世の金箔テーブル、等とベラスケス、レンブラント、ティツィアーノなどの絵画。5代目未亡人により国に寄付。

・ロイアル クレセント インテリア博物館

建築家ジョンウッズの作で18世紀ごろに完成した、ローマのパチカンのサンピエトロ寺院を真似た連棟の3軒の建物のひとつ。当時の室内装飾を観られる。

・ストラスフォード アボン エイボン ウォリック城

14世紀に建ったウォリック伯爵が今も住む城で、中世の庭、冑や戦士の絵画やルーベンス、バンダイクの絵画が見られる。

・ブレンハイム城

チャーチルの生家で領主である弟君が住みながら一部の城内を見せている。絵画、家具、調度品、彫刻、オートキャンプ場、庭内施設ミニ汽車鉄道あり。

・エジンバラ

ホーリルード宮殿は現在の英国女王がスコットランドの別荘訪問の時にのみ使用。他の時は一般に開放されており、絵画、家具等々が観られる。

【パリ】

・ニッサン ド カモド博物館

市内。貴族の生活全般を見せる私邸のミュージアム。18世紀頃の装飾性の高い美術品が多い。

・ジャクマール アンドレ博物館

市内。19世紀の絵画、美術工芸品、家具、調度品の収集で名高い。

【ジュネーブ】

・プチ パレ美術館

市内。古典絵画から近代の著名な画家たちの絵画が中心。優雅で豪華な私設美術館。

【その他】

ユニークなミュージアム要素を加味した施設や街

・ロンドンのコンノートホテル

貴族の私邸をそのままホテルにして、家具、調度品も当時のまま使っている。

・ロンドンのクラリッジホテル

バスルームの水道の蛇口も含め全てアールデコ時代のインテリアを使用している。

・イタリアのホテル

イタリア、フロレンス郊外の丘陵地にある、サンミッシェル教会をホテルに改造。現在ホテルとして稼働中。

・画廊

フランクフルトの多くの画廊では1点20ドルの保険料で絵画貸出を行っている。アムステルダム画廊でも1日当たり¥2000程度で貸し出す。

・法人ビル

ビルのロビーや応接間、客室では絵画、彫刻が多く観られ、中には美術館にあってもよい作品を拝見できるところもある。

・街

米国のカーメル、ニューオリンズ。仏国のお城とワインの街ロアール、ワインのボルド、ナンシとディジョン。ニースの画家たちの街やニームの香水の街。伊国のベニスの宗教美術館と私設美術館。コモ湖のカルロッタと別荘郡。ベルギーのブルージュ運河の古都。等々。

## 北斎の町・小布施

小布施堂

市村 次夫



国際シンポジウムのディスカッションにて

北斎と栗と町並み  
修景で知られる長野  
県小布施町は、長野  
市の北東17kmに  
位置する人口1万2  
千人の小さな町。小  
布施のまちづくりの  
原点は昭和51年に

開館した北斎館で、  
平成12年7月には累計入館者数が5百万人を突破し  
た。平成10年には「第三回国際北斎会議」を開催し、海  
外に対してあしがかりを固めたこの町が目指すものは、

### 1. 小布施の北斎ブーム

昭和41年モスクワで「北斎肉筆画展」が開かれ、小  
布施から多数の北斎の肉筆画が出品された。中でも祭  
り屋台天井絵4枚は注目を集め、東京で開催された帰  
国展により小布施の北斎は全国に知られるようになり  
始めた。これを契機として町民の間で北斎に対する関  
心が高まり一種の北斎ブームの様相を呈するようにな  
る。伝来の北斎画を売ったり、贋物を買わされたり  
の騒動や真贋論争というような現象も含めての話である。

ここにおいて時の町長市村郁夫（父）は、北斎作品  
の流失を防ぎ、また小布施が北斎研究の拠点になるこ  
とを願って美術館建設を決意する。

### 2. 北斎館誕生

とはいえ、当時（昭和40年代後半）小さな田舎町  
にとって美術館は贅沢施設であり、町議会もほとんど  
が反対の機運だった。そこで全町的に北斎の勉強会を  
起こし北斎に対する町民の理解を深め、また祭り屋台  
の収蔵庫の必要性を説いて回った。

あわせて、町は開発公社を設立し宅地造成事業を進  
めていたが、その収益金により建設し、且つ又、美術  
館というより祭り屋台の収蔵庫といった構造と外観の  
建物を設計した。

そうした準備の下で、財団法人北斎館を設立し、町  
会議全員と反対派の大家を理事に迎えるという荒業で  
建設。昭和51年、北斎の肉筆専門美術館は開館にこ  
ぎつけ、北斎館と命名された。

### 3. 小布施のシンボルに

当初は、運営費が負担になるような場合は土日だけ  
開館し経費を節減したらとか、つつましく考えていた  
が、予想に反し人気を呼び初年度から入館者3万人を  
超え、数年後には10万人を超える人気施設となった。  
しかし館蔵品無し（展示作品は全て借り物）でスター  
トした美術館であるため、ひたすら経費節減につとめ、  
益金は全て北斎の作品購入に当て、現在では70点余  
りの館蔵品を持つに至った。こうして小布施の町その

ものが誰言うともなく「北斎の町」といわれるように  
なる。

### 4. 町並み修景

このように北斎館の存在がきっかけとなり、町自体  
が注目を集めるようになると、官・民の両サイドから  
期せずして景観に関する関心が高まり、昭和57年か  
ら始まったのが町並みの修景事業だった。

できるだけ古い建物を再利用し、新しい建物は既存  
の建物に調和したものとし、また建物と建物に囲まれ  
た空間を質の高いものにしていこうという北斎館周辺  
の景観整備事業であり、同時にそれが町全体に広がる  
ムーブメントを目論んだ企てだった。

結果的にこの運動は町民の支持を得て、今も続く小  
布施の流儀として定着し「外はみんなのもの。中は自  
分たちのもの。」は小布施の合言葉となっている。

### 5. 小布施系、我が家も美術館

景観が整い、質の高い空間が現出してくると、次に  
盛り上がるのはイベント熱である。1987年秋に開  
催された2つの美術イベントはその後の小布施を方向  
づけるものとして特に重要だった。

小布施堂主催の現代彫刻展「アートサーキット・小  
布施系」と町主催の「我が家も美術館」である。北斎  
も江戸時代のコンテンポラリーとの考えから、コンテ  
ンポラリー・アートに小布施も関係性を持つべきとの  
主張のもとに開かれたのが小布施系で、芸術文化を生  
活の中への主題で開かれたのが、伝来のお宝を自分の  
家に展示するという「我が家も美術館」だった。

両者とも民家参画型のエキジビションで、美術館か  
ら外に飛び出した美術展覧会という特徴をもつもの  
だった。

### 6. 第三回国際北斎会議

長野五輪直後の1998年4月、小布施町で「第三  
回国際北斎会議」が開催された。海外から北斎研究者  
が150人、国内から250人の学者や研究者が一堂  
に会し、4日間にわたり論文の発表を主体に行われた  
学術会議である。

それまでの2回はどれもイタリアのベニスで開かれ  
ていたが、小布施が招致出来たのは、北斎館が北斎芸  
術の普及という面での功績が大きいと認められた結果  
だった。

町当局はこれに併せて「北斎フェスティバル」と銘  
うち様々なイベントを繰り広げ、町民も世界の学者達  
との交流を深めたり、或いは「北斎」を楽しんだりで  
町を挙げての盛り上がりを見せた。

この北斎会議こそ「小布施の北斎」の集大成である  
と同時に北斎研究の拠点としての小布施の出発点でも  
ある。

この30年、小布施にとって「北斎」は町づくりの  
原点であり、町づくりの中心軸であり続けたといっ  
ても過言ではない。

## ヘリテージ・ミュージアム都市への序曲

新居浜市 森賀 盾雄

### 1. はじめに

愛媛県新居浜市は南に四国山地、北に瀬戸内海に抱かれた人口13万人の古くからの工業都市である。2000年8月18日～20日の3日間、新居浜市・別子山村・愛媛県・(財)研究産業協会が主催して「近代化産業遺産全国フォーラム」が我が国で初めて、新居浜市で大規模に開催されたところである。市民団体・自治体・企業・有識者など全国から約2300人が参加して、現地視察を含めて多彩な内容で開催できた。

しかしながら、この開催は、7割の新居浜市民にとっては、唐突・意外な感じがしたのかもしれない。3割の産業遺産熱中派市民と7割の産業遺産意外感派市民といった状況の中で、このフォーラムを仕掛け、やや強引に引っ張って、事務局長として進めてきた者として、開催に至る、その理由と経過・若干の展望を、心象風景的に記してみよう。

### 2. 住友の経済活動と地域住民生活の精神的落差

今から約400年程前(1585)に初代住友家が京都に誕生し、その後、大阪で住友企業が大阪で銅製錬等の業を営み始め(1630)、そうして300有余年前(1691)に別子銅山が開坑した時から新居浜・別子山地域と住友企業との関係が始まったのである。標高1200メートルの山中から堀り始め、やがて明治の近代化により地中深く坑道が下がり、1973年の閉山時には海拔マイナス1000メートルにも達していた。坑道が下部に向かうと共に、下部の横坑道出口に採鉱本部が移り、1200メートルの山中からやがて標高750メートルの地区へ移り、さらに標高156メートルの地区に移ったのである。一般的に、我が国の鉱山というものは山中、それも周辺は山々に囲まれた場所にあることが多く、鉱山閉山と共に劇的な廃墟と化するのであるが、新居浜の場合は標高1200メートルの鉱山集落跡と標高750メートルの鉱山集落跡は植林により緑なす山々に帰り、海岸部に別子銅山の製錬から派生・発展した化学、重機械、買鉱石による銅製錬や他の金属製錬工場がハイテク化、ニューマテリアル化を進めながら展開を続けているのである。これらは多分に、別子銅山が開坑して10数年後(1702)に新居浜平野を縦断し海岸部に荒銅と物資の拠点をつくり、やがて明治時代に海岸部に近代的製錬所を作ったことと、いずれ別子の鉱石が枯渇したことを考慮して、昭和の最初に鉱石かすで海岸部を埋め立て、工場地帯と港を作った住友のリーダー達の英断によるところが大であるが、それにも増して283年間もの長きにわたり住友のみで別子銅山の経営を続けたことにもよるであろう。

しかしながら、棹銅といわれる銅の最終製品をつくる最終製錬所は、江戸時代には大阪の長堀にあり、新居浜に近代的製錬所が出来てからは最終製品となってい

た伸銅品や加工品の工場は、やはり新居浜地域にはなかったのである。ゆえに、300有余年も銅を産出し続けるまちでありながら銅の最終製品は灰皿一つ産出しなかったまちである。(この10年程前から銅の薄板クラフトの工芸家グループが市内で活躍しているが、その薄板の購入に苦慮している。新居浜では、1枚400キロもある電気銅の厚板出荷しかしておらず、薄板のロールを数十メートル切り売りしてくれる大阪方面の企業を探すのが大変なのである。) また、亜硫酸ガスの対策から大正2年(1913)に肥料製造所として生まれた住友化学も、やがて石炭化学から昭和30年代(1958)に国内最初の石油化学工場(高圧ポリエチレン)として展開し、近年はインターフェロンを住友製薬として産出しているが、いずれも中間素材を延々と製造・搬出し続けてきたのであり、最終製品として私達の身の回りにある化学製品には新居浜で加工したものは極めて少ない。



国際シンポジウムのディスカッションにて

地方素材型工業都市の宿命と言ってしまえばそれまでであるが、海岸部の工場地帯は市民の生活実感とはかけはなれたままで時が流れ続けたのである。やや極端に言えば、工場地帯は、家族にとってあたかも父親が生活の糧としての賃金を稼ぐ場所としてのみ存在し、地方自治体にとっては、税収源としてのみ存在を続け、「モノづくりのパラエティ性」が持つ技術文化や生活文化への精神的広がりやを欠いたまちとして、文化といえ、中央経由のふりそそぐメディアシャワーに必要以上に引き付けられる中で、地域の個性的文化の掘り起こしへ向かう市民の興味関心を殺いできたのではなかろうか。工場地帯は素材生産という工業国家のベース製品を産出し続けるも、市民のそれらのものづくりへの関心は弱く、広がりやに欠け、それらの素材のその後の運命までの追跡をするに至らなかったのかもしれない。昭和60年代に、愛媛テクノポリスが議論され新居浜市を副母都市として承認された時(1988)には、住友化学愛媛工場で光ディスク等の最終製品製造工場を新設していたが、やがて失敗・撤退し元の素材生産に特化することとなった。住友化学にしる、住友金属鉱山にしる別子銅山から生まれた住友企業には素材型から抜け出せない体質があるのかもしれない。

市民の企業活動への関心は、戦後の労働運動の激化に伴う、労働運動の進展に付随した部分を除いて、あまり広がることもなく、さらに、一部労働運動の指導者や外からのジャーナリストの「住友独占資本支配のまち」としての垂直的・短絡的とらえ方が、企業活動に係わる水平的・多様な情報や市民生活への着目を過剰に押し止めてきたことも、今更ながらに実感を強くするのである。

一方、住友企業は、企業リーダー層を中心としたグ

ローバル情報の独占ということはあるものの、江戸～明治～大正～昭和と我が国の政治・経済への影響力を拡大し、企業グループを形成し、世界との多様なつながりを拡大していったのだが、新居浜市民は海岸部の工場地帯で意識はストップし、広く世界へはばたくことが出来なかった、と言え言過ぎであろうか。例えば、幕末から明治にかけて活躍した住友初代総理事広瀬宰平が、明治20年に別子山上で職員一同を集め演説しているが、その内容は近代化の苦勞や能力主義人事、貯蓄・倹約の奨励、など多様な内容になっているが、その中で「知識開発の重要性」に関して、「明治維新前においては、学問もわずかにアジアの一地方のことを知るだけで事足りていたが、現在は内外万国に通じていなければ、通用しないときである。知識のあるものは貴く、知識のないものは卑しく、学事は人生不可欠の要件となった」と語った。当時、住友と日本の置かれた状況と将来を見据えた、遠大なる志の広瀬ならではの真骨頂がよく表れているが、その後において、住友の職員や地域中小企業者・地域自治体関係者を含む住民は、別子銅山と海岸部の工場地帯の生産活動との関連で内外万国に通じていったのであろうか。今日、20世紀最後の年に、既に別子銅山が閉山して四半世紀を経て、産業遺産を活かした全国フォーラムを開催し、住友の企業活動300有余年の歴史を学び、世界と未来に突き抜けていく(万物に通じていく)私達の活動を広瀬が見たらどう思うだろうか。

### 3. 精神的落差を超える市民文化としての

#### テクノ・ヘリテージ資源

1973年に別子銅山が閉山して、住友企業はいち早く山岳地帯への入り口に『別子銅山記念館』をつくり別子銅山への地域的終止符としたかったようであるが、文化・観光・レクリエーション施設を求める市民に応えるかたちで、閉山後18年を経過して(1991)、最後の採鉱本部跡に、市が主導して「銅山史と自然の杜」をテーマとした『マイントピア別子』観光レクリエーション拠点をオープンした。閉山後に産業の衰退した他の鉱山まちが急いで開設した鉱山観光地にかなり遅れて、じっくりと時間をかけて開設したのだが、皮肉なことに先行鉱山観光地と大差のない内容のものを作ってしまった。当然ながら、集客状況は数年後には当初の半減となり(1999年には35万人)、苦戦を強いられることとなる。採鉱施設のほとんどを一掃して建設したのだが、やがて、建設後8年を経過して、新しく建てた建物の近くに、手付かずに残っている赤煉瓦づくりの旧水力発電所を指さし「やっぱり本物は迫力ある。感動する」という言葉が市民から出始めるのである。私を含む市民団体が「産業遺産の学習と活用運動」を展開し始めていたが、文化庁が近代化遺産の登録文化財制度をスタートさせ、産業考古学会や産業技術史学会、さらには古い建物を活用するまちづくり運動家など多彩・多様な有識者が新居浜を訪れ市民団体と交流を重ねていった。(財)余暇開発センター(現・自由時間デザイン協会)が新居浜の独自調査を行い、テクノ・ヘリテ

ジ・ツーリズムを提唱していただいた。市民団体の盛り上がりで外部有識者の声を支えとして、平成8年度に新居浜市は『近代産業遺産活用調査』を行い、平成9年度には市の市政運営方針に「産業遺産のロマンの息づくまちづくり」が登場することとなった。しかしながら、それでも市民全体の盛り上がりは弱く、市民の産業遺産学習への広がりが始まるのは、既に深く学習を進めている30人程度の核となる人材と先の有識者達を含めて、増殖するヒューマンリレーションズが生かされる場が出来る、平成9年以降になってからである。すなわち、平成9年、先の広瀬宰平の邸宅とその記念館という学習拠点が市によってオープンしたこと。さらには、平成11年に、市民団体「マイントピアを楽しく育てる会」が結成され、産業遺産のボランティアガイドが実施されるに及び、ガイド実施者にガイド講座として産業遺産の熱のこもった知識を供給する場が出来たことなどにより、市民全体への認知が進み始めたのである。

ガイドたちは、競って学習を進める。また、お互いに教え合う。ガイドの経験を伝え合う。別子銅山の関連産業遺産を訪ねる関西ツアーを市民団体独自に実施する。ガイドの実践と座学がうまくかみ合ってきた。やっと、別子銅山閉山後四半世紀を経て、別子銅山の歴史と住友の新居浜での企業活動、そしてそれに係わってきた生活、労働、環境、技術の総体を具体的事例とグローバルな観点で把握しようとし始めたのである。自らの存在と生き方に係わらせながら、海岸部の工場地帯でストップされてきた意識を主体的に開放し始めた、と言えるのではないだろうか。産業遺産は知的資源ゆえに、市民の学習行為の進展が不可欠であり、さらに別子銅山関連産業遺産は300有余年の長き歴史があることと、ハード遺産の分布があまりに広大に分布(海拔0メートルから1200メートルの高低差と直線距離20キロメートルの間に点在)していること等が活用運動の点火に至る時間がかかったと思われる。しかし、300有余年前から継続・発展の住友一社の産業活動の連続性により、過去・現在・未来の産業活動に係わる総体を学習出来る資源に恵まれていることにより、その運動点火も大きな炎となったのではなかろうか。ともあれ、知的資源は情報資源と同様に市民が手に入れると、その人の記憶力の低下や死亡以外に減ることはなく、流通・増殖するところにその優位性があるのである。

### 4. ヘリテージ・ミュージアム都市へ

私達が目指す「産業遺産を生かした生きた博物館都市」それは、産業遺産をまちづくりや産業起こしに活用することと、現在稼働している工場地帯をも含めてミュージアムに活かそうという考えである。

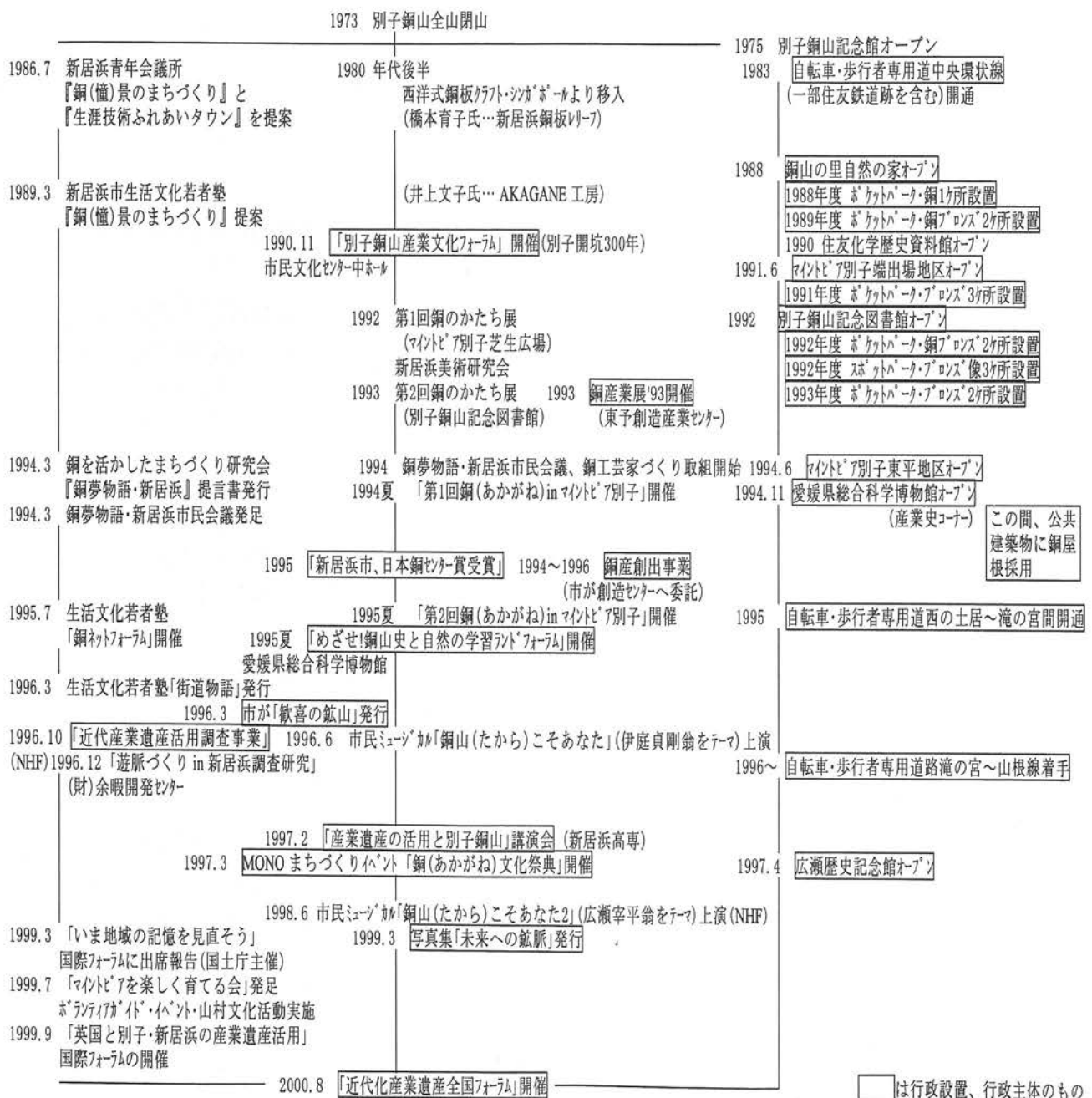
山から浜、そして海へと鉱工業の発展を刻んだ300有余年のテクノ・ヘリテージ学習ルートとその逆コースの、海から浜、そして山へのコースを環境学習ルートとしてとらえている。2001年には新居浜の海岸部に口屋新居浜分店が出来て300年目である。住友の企業活動のグローバル化に対して、地域住民の

意識が外にこぎ出せず、置いて行かれて300年である。ならば、である。300年の産業遺産を切り口として、もっともっと壮大・グローバルにターゲットを設定してこそ帳尻が合うというものである。それが、大地と地下を含めた地球そのものと人間の営みを学習する『ジオ・ミュージアム』（小さな地球のモデル学習都市）構想である。現在、ヘリテージ・ミュージアムを核とした展開戦略とその具体的実践プログラムづくりに取り組み始めたところである。

また、愛媛県が愛媛文化遺産制度の創設の代表テーマの一つとして、別子銅山関連産業遺産を取り上げることを決定し、検討いただいている状況や、四国通産局が「産業観光」の目玉として産業遺産を位置付けている

ことや、全国の盛り上がりつつある状況等もあるが、今回の「近代化産業遺産全国フォーラム」を多少強引に開催にこぎつけた私自身の心象風景を書いてきたが、新居浜の海岸部の工場地帯を突き抜け、300有余年の時空を超えて地域社会の未来を「ヘリテージ・ミュージアム」として、さらにはジオ・ミュージアムとして構築することは、30年間の市職員として、また、生活者として、この地域で主体的、自律的、創造的に生きる道を模索してきた私自身の一つの結論であり、出発点に他ならないのである。（別紙として、別子銅山閉山後の経過と知の博物館都市を目指す簡単な準備メモ表を掲載しておく）

### 近代産業遺産のロマンの息づくまちづくり・取組経過



## 知の博物館都市を目指すアクションプログラム (近代化産業遺産ネットワーク形成の活用方策)

## 構想案



## 論考・提言・実践報告

### 会話採取調査とその周辺の問題について

北海道大学 佐々木 亨

本会報 No.17 において、笹倉いる美氏（北海道立北方民族博物館）は「来館者調査について思うこと」（笹倉 2000 : 12）のなかで、筆者らが実施した非告知の会話採取調査に関する批判を展開している。

笹倉氏のご批判は、2000 年 2 月に電話や電子メールを通じた筆者とのやりとりなどをもとにまとめたものと思われる。2 月以降、ご批判いただいた問題について筆者が行った若干の調査からも、このご批判は当を得たものであり、かつ我々の調査計画時における考え方にいくつかの抜け落ちていた点があることも示唆してくれた。ご批判をお寄せいただいた笹倉氏に心から感謝申し上げる次第である。

しかし、筆者（当時の所属は東北大学）がこの調査内容を紹介した会報 No.15 の報告（佐々木 1999 : 11）では、調査手法に関してはほとんど言及していなく、ご批判は一般会員には非常に分かりにくい内容になっている。したがって本稿では、まず全体の調査フレームとともに問題となった調査手法を説明したい。次に、この調査手法に関する現時点での筆者の考えとその周辺に存在している問題点などを記すこととする。

#### 1 調査フレーム

この調査は、北海道開拓記念館（以下「記念館」と略す）常設展示室のアイヌ展示を評価する目的で行った。調査を担当したのは記念館の学芸員 2 名に、筆者を含めた 3 名である。

調査は、記念館が 1997 年度から 2000 年度まで継続している研究である文部省科学研究費補助金「民族学的情報伝達装置としての博物館の意義に関する基礎的研究」の一環として行い、筆者が研究代表者を務めている科研費の一部なども使用した。

評価の視点としては、(1)コーナーごと（ここでは 7 コーナーに分割）の観覧時間を計測した上で観覧後に再認テストを行い、展示から何が伝わったかを測る（1999 年 10 月 22～24 日実施）。(2)展示を通じた情報の伝達以外に考えられる、観覧者にとっての展示の価値を測る（1999 年 9 月 14～15 日実施）という 2 つの視点をとった。(1)の被調査者と(2)の被調査者とは異なる。

以上の展示評価は、既に完成された展示の効果や価値を測ることを目標としている。また、今後の異文化展示に関する企画展（記念館ではアイヌ以外に、サハリンの先住民やイヌイトなどの企画展も行っている）および将来の常設展示リニューアルの際の基礎的データとすることも視野に入れている。

以下、批判の対象となった評価の視点(2)に関するを中心に記すこととする。

#### 2 会話採取調査の実際

##### (1) 会話採取調査の採用に至るまでの考え方

展示による情報伝達以外で展示が観覧者に及ぼす影響や事態を重要視した最近の論考（橋本 1998 : 544-547、山田 1998 : 33-35）に注目し、我々は今回「情報の伝達以外に考えられる展示の価値」を測る指標を「来館者間のコミュニケーション」ととらえ、コーナーごとの観覧時間計測とともに、会話採取調査を行った。会話採取の際、被調査者には調査をしていることを知らせなかった。

この調査法を選択する際、筆者らが議論したことは以下の 4 点である。1 つは、被調査者個人が特定されないようなデータの処理方法・公開の仕方である。データは最終的には、例えば「事実をいう・パネルを読む」「関心・感嘆の表現」などのように類型化し、コーナーごとの発生頻度のみを表す形に処理し、公開する際には個人が特定されないようにすることである。なお当時、知人の心理学者にこのような調査法を採用することは、心理学の調査においてどう考えられるか尋ねてみた。回答は、個人の名前、年齢、性別、生年月日など、個人を特定せしめる情報を列挙せず、かつ大量のデータを、計量的に扱う方法で公開するのであれば、データを採取された被調査者に何ら支障をきたす心配がないので、調査法に関して問題視されることはない、であった。

2 つめはデータの利用方法である。「研究のための研究」に終わらないように、カウントされた会話発生件数は、観覧時間や展示資料、展示手法によってどのように違うのかを分析した上で、その結果を実際の展示にフィードバックすることを常に念頭に置くこととした。3 つめはもし調査者が被調査者になった場合、このような調査を知らぬ間にされたことをあとで知り、不愉快に感じるかである。これに関しては、調査者 3 人とも自分がされてもまったくかまわないという考えであった。4 つめは、動物園における非告知の会話採取調査の実施事例（並木 1999）である。これによれば、欧米の会話採取調査の倫理基準としては、個人が特定されない限り問題ないという情報のもと、動物園でこの調査法を採用していた。

以上の 4 点を議論し確認した上で、筆者らは非告知の会話採取法を採用した。

##### (2) 会話採取の状況

記念館の常設展示 3,000m<sup>2</sup>の中で、今回対象としたアイヌ展示は約 175m<sup>2</sup>（7m×25m）である。調査を実施した 2 日間において 60 人（組）の観覧者を調査対象としたが、そのうち 14 人が 1 人での観覧者であったため会話が発生せず、調査の対象とならなかった。調査対象となった 46 組は 2 人以上で観覧していて、そのうち 32 組（70%）において会話が発生した。発生した会話を採取する際、1 人の調査者が対象エリア中央の住居ジオラマの前にある椅子周辺にとどまり、そこで聞こえ

る会話を聞きノートにメモをした(定点観察に近い。後述するプライバシーの侵害【定義1】にはあたらないと考える)。ただし、会話が発生した32組中12組においては、調査者は椅子を離れ、観覧者の近くで会話を聞いた(追跡して観察した。後述するプライバシーの侵害【定義1】にあたると考える)。

聞き取るレベルは、最終的に「事実をいう・パネルを読む」「関心・感嘆の表現」「事実に関する疑問」「相手への呼びかけ」の4つのカテゴリー、およびそれ以外のカテゴリーに分類できればよいと、それに合わせた程度で行った。

### 3 会話採取調査の是非について

#### (1) 会話採取の受けとめられ方

今回、非告知の会話採取法の是非を検討する場合、この方法に対する一般観覧者の受けとめ方が、まず始めに筆者にとって重要な要素となった。私も笹倉氏と同様に、数十人の知人にこのような調査の被調査者になることをどう感じるかを尋ねてみた。結果は笹倉氏とほぼ同じで、約1割程度がまったく問題ないとし、残り9割が調査されたくないというものであった。

また筆者のこの調査では、会話を聞かれる状況によってその感じ方がかなり異なっていることも分かった。例えば、動物園(屋外)において人気のある動物の前で押すな押すなの状況ではほとんど気にならないが、比較的閑散とした博物館では絶対にいやだという意見があった。さらに、通常、観覧者の観察は会話と行動が対象であるが、その両方とも観察されることを不愉快に感じる者と、どちらかという会話聞かれることは不愉快であるが行動は我慢できるという者がいる。会話と行動に関する観察は受けとめられ方が異っているようである。

非告知による会話採取や行動観察調査は、民間企業の調査において普段よく行われる手法であり、例えば、ファッショントレンドを発見、創造する過程の調査やファースト・フード利用者の注文待ち時の言動調査など、さまざまな場面で行われている。そのような現実を知っているためか、筆者自身は個人が特定されない範囲であれば、会話採取の被調査者になり、データが使われることにまったく抵抗がなかった。したがって、正直なところ笹倉氏と自分が行った調査結果には意外であった。調査される側の一般的な思いと自分の感覚にかなりのズレがあることを理解していなかった。

また会報の中で笹倉氏は、会報に批判を書くこと自体が、そうした会話採取調査が博物館において行われていることをあえて知らせるようになることについてためらいがあると述べている。筆者は、本会報を含め学会誌などの学術的な印刷物に掲載される情報を、一般の方が目にする機会は極めて稀ではないかと考えていた。しかし、博物館において会話採取が実施されていることを批判的に紹介している複数のホームページの存在を知った時、学術情報が流布する範囲は、一昔前とは

違い、格段に広がっているという認識を筆者は持った。それとともに、会話採取調査を不愉快に思う観覧者がこのようなホームページを読んだ場合、多くの方は博物館を訪れるたびにどこかで観察されているのではないかという疑心暗鬼に陥り、博物館全体に対する信頼が失われると想像した。

今回、心理学の調査基準から判断して問題がないという情報が、調査法選択の上でかなり大きなウェイトを占めていた。しかし、博物館における調査と心理学の調査とは基本的に大きな違いがあることを充分認識していなかった。心理学では実験観察の場合、調査(実験)終了後にその場や状況がなくなることが多く、そもそも場や状況に対する信頼が失われることは少ない。また、会話分析に関する学術研究でよく紹介される「119番通話」に関する研究(椎野1996など)では、消防本部に録音されている119番通報の会話テープを利用している。通報者に対してその学術的利用について知らせていないが、この場合は極めて緊急的な状況における調査であり、日常の場における会話採取ではない。しかし、博物館は半永久的に存在する日常的なパブリックな場である。一般に博物館では観覧者を自然観察するので、そこで会話採取調査を実施することによる博物館利用における短期的および長期的な影響はなにかを具体的に充分検討しているか否かが重要となるはずである。

#### (2) インフォームド・コンセントと

##### プライバシーの保護

博物館における非告知の会話採取を不愉快に感じるか否かという観点から、この調査を実施しないのであれば、もし「知らない間に会話を聞かれていてもまったく平気である」という筆者のような被調査者の集団に対してならば、調査を実施しても差し支えないという結論になる。また、筆者の調査から分かったように、動物園(屋外)において人気のある動物の周辺では、非告知の会話採取が気にならないと感じる人が多い。したがって、この調査を不愉快に感じるか否かという観点から実施すべきではないとするのは、十分な論拠になり得ないと思う。

心理学界において一般に充分定着しているとはまだいえないようであるが、会話や行動を対象とする観察法における被観察者に対しての倫理では、原則として本人の了解を必要とする。また、被観察者が観察されていると意識することによって、行動が変容してしまうこともあり得るため、隠しカメラでデータを集めざるを得ない場合は、観察終了後に被観察者に対して十分な説明が行われなければならない(川上1997:99-100)という主張もある。インフォームド・コンセントを重要視する考え方である。

博物館における観覧者間の会話は、話しかけている相手以外を聞き手に想定していなく、プライベートな行為であることは間違いない。その会話を発する声が

大きくて、自然と聞こえてくる場合は別であるが、調査者が聞こうとして何らかの努力をする場合はプライバシーの侵害【定義1】となるであろう。つまり、博物館において統計学的正しさに配慮し、会話採取を計画的な調査として行う場合、個人のプライバシーを侵害するおそれがあるため、原則的には事前の告知が必要と考えるべきであろう。心理学では観察終了後の説明も可能であるとしているが、プライバシーを守るという観点からすると、会話採取開始と同時にプライバシーの侵害が始まっているため、事後の説明はあくまでデータ使用に関する了解行為であって、プライバシー保護とは関係ないと考えられる。

一方、先に述べたように博物館はパブリックな場であり、そこでは調査者のみならず、他の観覧者からも、いつでも会話を聞かれるという状況を孕んでいる。調査者が意図的に聞こうとしなくても会話が耳に入る場合は、電話や手紙のように極めてプライベートなコミュニケーションの場と社会的に認められているものを聞く、読むのとは基本的に異なり、非告知の会話採取の対象となっても構わないのではないかという考えも成り立つ。しかし、最近のプライバシーの概念では「ひとりにしておいてもらう権利」(この権利を侵す場合は、プライバシーの侵害【定義1】になると考える)という消極的で受動的なものから、情報化社会の発展と相まって、「自己に関する情報の流れをコントロールする個人の権利」とする積極的で能動的な要素を含むようになった(堀部1988:60)。そうであれば、どのような会話であれ、その内容は会話を発する個人がコントロールするものであり、聞かれた瞬間にプライバシーの侵害【定義2】が発生すると理解するのが適当であろうか。

プライバシー侵害の定義に関する問題はともかく、笹倉氏が書いている、博物館は利用する人たちが安心して豊かな時間を過ごすことができる場であるという基本的な考え方には筆者も異論を唱える余地がない。そうであれば、多くの観覧者が不愉快に感じ、かつプライバシーを侵害するおそれのある非告知の会話採取法を筆者は用いるべきではなかった。ただし、以下の(5)で述べるように、限定的に非告知の会話採取が認められるであろう状況が存在する<sup>1)</sup>と考える。

### (3) ガイドライン

ところで、笹倉氏は「では調査のガイドラインを作る必要はないか」という話になるのかもしれませんが、博物館をよくしようと思っていれさえすればそれで十分ではないか」と述べている。しかし、ご批判いただいた会話採取調査を実施した筆者らは、少なくとも調査した博物館の展示を将来的によくしようと考えて実施した。また筆者のほかにも、いままで博物館関係の学会誌において、非告知による観察法を用いた調査結果を報告した方も同様であると確信する<sup>2)</sup>。

観覧者が不愉快に思う調査法を博物館が実施し、そ

のことを観覧者が別の機会に耳にしたとき、博物館界全体の利益が損われる可能性があることは、既に述べたとおりである。そうであれば、(a)今回のような問題のある会話採取調査の計画だけでなく、観覧者を対象とする一般的な調査を実行に移す際、再考するきっかけを与えるためのチェック項目、(b)限定的に非告知の会話採取が認められるであろう(5)に述べる状況の要件、(c)本稿ではあまり言及していない非告知の行動観察の是非や要件、さらに(d)会話採取を告知して実施する際の要件(告知の時期、データの処理方法や公開方法など)について議論し、一定の方向を広く周知することは、博物館界にとって決して必要のないこととは思わない。

以上、(1)(2)(3)において非告知の会話採取調査の是非に関する筆者の考えとそれに関係することを論じた。

### (4) 調査フレームに照らした

調査法に関するもう一つの再検討

今回、評価の視点の1つに「情報の伝達以外に考えられる展示の価値」を設定し、それを測る指標を「来館者間のコミュニケーション」に限定した。しかし、それよりも「展示で直接表現していない事項に関する波及の仕方」ととらえる方がいいのではと考えている。実際、採取した会話を類型化すると、先に述べた4つのカテゴリー以外で、展示で直接表現していない事項に属するものは「過去への回顧」と「アイヌ文化全般に関する考え」であった。このことから考えると、展示室における非告知の会話採取よりも、観覧者属性調査(年齢、性別、居住地、職業など)を含めたインタビューを中心とする調査法が適切ではないかと判断する。その場合、普通会話の発生しない1人の観覧者からも情報を得ることができるという利点がある。

### (5) 非告知の会話採取が容認されるケース

自分が担当した展示が一体どのように来館者に受けとめられているのかは気になることであり、実際展示室に行って会話を聞くこともあった。笹倉氏は述べている。筆者も学芸員としてこのような経験をしたことがあり、この程度のことは観覧者から不愉快に思われない範囲であり、プライバシーの侵害【定義1】に関しても問題がない場合が多いであろう。

展示担当者が観覧者の反応を会話を通してみるというのは、その展示に関する課題発見や問題解決の糸口を探り出す行為であり、その結果は特に対外的に公開されるものでもなければ、その必要もない。また、その場合は組織的でも継続的でも計画的でもない会話採取であり、聞くという行為を意図的に行ってはいないが、調査という段階にはほど遠いものである。

ところで観覧者に対する調査には、リサーチに向かうものと評価に向かうものがある。両者の違いは、前者は概括的な原理を発見するために、論拠の基準として統計的な厳格さが要求され、その集計分析結果は広く

利用可能な形で公開することを要求される。しかし後者では、あくまで博物館内部の者が情報を共有できればよく、それほど厳格な統計的正しさは要求されない。また、そのデータは展示改善のための具体的な問題解決に利用される（芦谷 2000：18-19）。

どちらの場合でも、調査を企画するきっかけとして、または調査計画段階の情報として、上のような状況で採取された会話が有効に使われることがあると思う。評価の位置づけで行われた今回の調査を省みて述べると、評価においてはデータの公開を前提としていなく、内部で共有すれば良いという立場であるため、調査する側の論理一辺倒になってしまい、調査以前の容認されるべき会話採取と、その後の組織的で継続的で計画的な調査行為自体との境界が意識の上でかなり曖昧になってしまった。

#### 4 まとめにかえて

本稿では、主に非告知の会話採取の是非について論じ、一部の限定的な状況を除いて、博物館において会話採取を行う場合、非告知で実施することは許されないという結論に達した。

しかし、筆者は会話採取調査自体の有効性を否定していない。事前に告知することによりさまざまなバイアスがかかることを考慮しても、そこから得る情報の価値は無視できないと考えている。今回、このことについては言及できなかったが、別の機会に論じたい。

また筆者はこれを執筆している間、評価調査の位置づけを考え直した。それについて若干述べたい。

記念館において評価調査の一環で、展示されている情報の再認テスト（評価の視点(1)）を観覧者をお願いする際、質問票に向かい合った被調査者は自分が如何に正解を記入できないかという現実を知り、ほとんどの被調査者は「すいません。今度からよく見ます」や「これからもう一度確認してきます」というコメントを残していく。つまり、自分がテストされているという印象を持つようである。テストされているのは博物館の展示であり、テストは展示改善のために行っていることを説明しても容易に理解されなかった。

しかし、既に完成している展示に対する評価調査や展示制作途上および企画段階での評価調査が多くの博物館で普通に行われるようになり、その趣旨が正しく理解されるようになれば、博物館の展示は観覧者の意見で改善されるという認識が一般に定着するのではないかと考える。現時点では、自分がテストされていると勘違いする観覧者や、展示評価のために観覧を中断され、利用されるのは迷惑と考える観覧者も多いと思う。調査者側が調査していることを観覧者に知らせないのではなく、逆に積極的に評価調査の存在と評価の意義を明らかにすることで、上に述べたような認識が広まり、博物館がより身近な存在になることは望ましいのではないかと考える。

最後に、本会報にご批判をお寄せいただいた笹倉氏に

あらためて感謝するとともに、会話採取に関して賛否を含めさまざまなご意見、ご批判を筆者にくださった博物館関係者の方々にお礼申し上げたい。また本稿について、学会員のみなさまのご意見などをお聞かせいただければ幸いである。

#### 【注】

1) 筆者が後述する、限定的に非告知の会話採取が認められるであろう状況のほか、次のような場合も容認されているケースがあることが分かった。いくつかの博物館においては、調査担当者が調査目的からして会話採取法が最善の方法であると判断し、博物館責任者にその旨を説明し、責任者も同意した場合、会話採取が実施される。しかし、責任者が観覧者に知られないように会話採取をしてほしいと要請した場合、担当者が告知したいと考えても、結果として非告知の会話採取が実施されることがあった。

2) 1997～2000年における、日本ミュージアム・マネジメント学会、全日本博物館学会、日本展示学会の3つの学会誌に掲載された非告知による観察法を用いた、または用いたと思われる調査報告・論文は6編にのぼる。

#### 【引用・参考文献】

- 芦谷美奈子 2000  
「ワークショップ「琵琶湖博物館を評価する」記録」琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会編『ワークショップ&シンポジウム 博物館を評価する視点』：pp.16-28、滋賀県立琵琶湖博物館
- 川上正浩 1997  
「統計的な基礎」中澤潤他編『心理学マニュアル 観察法』：pp.96-107、北大路書房
- 佐々木亨 1999  
「研究動向紹介 博物館民族学と民族展示の評価」『日本ミュージアム・マネジメント学会会報』15：pp.9-12、日本ミュージアム・マネジメント学会
- 笹倉いる美 2000  
「来館者調査について思うこと」『日本ミュージアム・マネジメント学会会報』17：p.12、日本ミュージアム・マネジメント学会
- 椎野信雄 編 1996  
「119番通話の会話分析的研究—制度・組織のエスノメソドロジー—」『現代社会理論研究』6：pp.109-180、人間の科学社
- 並木美砂子 1999  
「来園者行動の調査におけるコミュニケーションモデルの適用」『全日本博物館学会 第25回研究大会資料』：pp.6-9、全日本博物館学会
- 橋本裕之 1998  
「物質文化の劇場—博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション—」『民族学研究』62(4)：pp.537-562、日本民族学会
- バルマー、マーティン 1982  
『統計調査とプライバシー』（法政大学日本統計研究所訳）梓出版社
- 堀部政男 1988  
『プライバシーと高度情報化社会』岩波新書
- 山田尚彦 1998  
「実践的展示批評に向けての試論—国立歴史民俗博物館企画展示「動物とのつきあい 食用から愛玩まで」—」日本民俗学会編『民俗世界と博物館—展示・学習・研究のために—』：pp.32-48、雄山閣出版

# 時 の 話 題

ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネジメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

## 「ハンズ・オン」とメッセージの伝わり方

～琵琶湖博物館の事例から～

滋賀県立琵琶湖博物館 芦谷 美奈子

### ●はじめに

「ハンズ・オン」という言葉が日本で紹介されて久しいが、今年3月にイギリスのティム・コールトンの著書が出版されて(\*1)、再び「ハンズ・オン」をめぐる議論が活発になってきた。6月に開かれた「ハンズ・オン! 2000」の集まりも、盛会だったようである。

「ハンズ・オン」をめぐる論点はいくつかあるが、ここでは展示のメッセージの伝わり方に着目したい。実際に「ハンズ・オン」を取り入れる場合、なぜ手法(ハンズ・オン)自体が目的となり、本来伝えるべき展示のメッセージが希薄になってしまうというケースがあるようだ。「ハンズ・オン」であってもなくても、展示が本来利用者に何かを伝えるべきものであれば、メッセージの伝達度つまりその手法の効果を測ってこそ成功したかどうかはわかるはずである。そこで原点に立ちかえて、「ハンズ・オン」をキーワードに、展示によるコミュニケーションの成立について調べようとした琵琶湖博物館の例を紹介したい。

### ●その1：展示横断プログラム

#### 「漁師修行の旅」(\*2)

平成11年度に文部省から委嘱をうけて開発した、常設展示横断プログラムの例を見てみよう。琵琶湖博物館の常設展示は比較的ハンズ・オンの要素が多いが、常設展示室の大きさから一度にまんべんなく全ての展示を見ることはむずかしい。博物館実習生による観察調査(未発表)でも、常設展示室のいくつかの場所があまり利用されていないという結果が得られていた。このような問題点の解決も視野にいて、このようなプログラムを企画した。

このプログラムは、いわば「スタンプラリー」のようなもので、「琵琶湖の魚、漁業、漁師」に関係したいくつかの常設展示のコーナーに、ポイントとなるハンズ・

オンの展示物や活動を追加し、それを順番にめぐっていくことで漁師について知ってもらおうというものだ。展示室ごとに、たとえば「魚をきわめろ」「魚をとる道具をきわめろ」といったテーマが設定



「漁師修行の旅」のキット。これを持って修行をする。

され、それに関係した謎解きを行う。たとえば「魚をきわめろ」では、参加者の子どもが自分で展示を調べて、琵琶湖の重要魚種であるコイの仲間に見られる咽頭歯という骨(歯)の標本の名前を探し、その名前の語路合わせで秘密の箱の鍵を開ける。箱の中には「修行終了シール」とコイの解剖模型が入っていて、シールを「おとも」というガイドブックにはり、解剖模型では自分の手でコイを解体して咽頭歯の場所を知るハンズ・オン活動を行う。

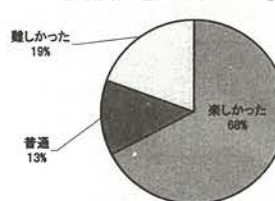
延べ800人以上の子どもの参加があったが、ゲーム感覚のプログラムゆえ、本当に「漁師」についてのメッセージが伝わったのかが気になった。場合によっては、シール集めをしたことだけが印象に残り、プログラムの本当の内容が抜け落ちてしまう可能性もあったからである。それを知るために、いくつかの調査を行った。

まず、定番ともいえる参加直後アンケートの結果から、子どもの反応として、子どもが「楽しかった」あるいは「難しかった」と感じた内容を示した(図)。詳細な分析は省略して、内容は大きくプログラムの内容に関係したものと、仕掛けの手法的なものにわかれた。たとえば「楽しかった」の3位の「鍵」というのは、プログラムの内容ではなく箱をあけるテクニックのことである。一方「難しかった」でも、2位の「番号探し」はゲーム感覚の手続きのことで直接内容と関係ない。これらからわかるのは、ハンズ・オンを取り入れた場合、利用者の側は一次的には内容と手法を同じような重要度でうけとっているということであろうか。しかし、「新しく発見したこと、感じたこと」を問うと、図のように内容的なことが多くなってくる。どこかの段階で「楽しいテクニック」から「理解できる内容」へ、何らかの変換が行われているという理解も成立するが、あくまでも推測でしかない。

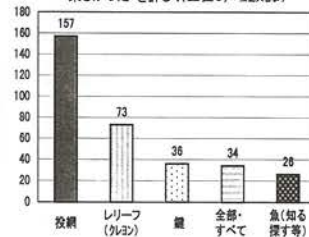
楽しいだけの内容で終わらなかったことは、プログラム参加後に送付した往復ハガキによる追跡アンケートの結果でも明らかになった。詳しい内容は省略するが、参加者の3割程度は、参加してしばらく経った後も、確実に企画者が意図した「漁師」についてのメッセージを記憶にとどめていたのである。

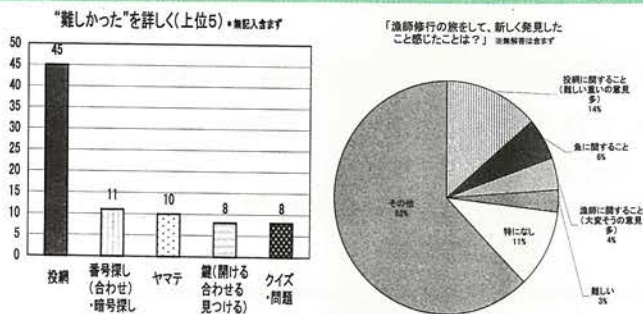
このプログラムの成果を測るために、直後のアンケート、事後の追跡アンケート、参加者の行動観察など、結局3つの調査を行った。結果としては、単純に「楽しかった」から「漁師のことに興味を持った」まで、広

「漁師修行の旅」はどうでしたか



「楽しかった」を詳しく(上位5)・数記入を省略





い幅の中で企画者の意図は伝わったと判断できたのだが、果たしてどうだったのだろうか。

## ●その2：「農村の暮らし」の富江家(\*3)

次の事例は、「漁師」のハンズ・オンからは少し異なる印象を持つものである。

琵琶湖博物館のC展示室「湖の環境とひとびとの暮らし」では、環境をテーマに展示を行っている。その中でも人気が高いのが「農村の暮らし」コーナーの民家(富江家)である。ここでは、家を丸ごと移築したのみならず、昭和39年のある1日を想定して、家具や農機具などの生活用具もあわせて展示している。家の周りには、本物の水が流れる水路があり、カワヤという水路に屋根をつけた建物や、灰部屋や鶏小屋、くみ取り式の便所などが全て再現されている。座敷には靴をぬいであがることもできるし、生活用具に直接触れたり、筆筒の引き出しをあけたりすることもできる。これらは、まさに「ハンズ・オン」といえよう。

実はこの展示ではいくつかのメッセージが想定されているが、中でも水をはじめとする様々な資源が、生活の中でどのように循環していたかについて知ってもらいたいという大きな目的がある。展示を企画したK学芸員は、当初から民家の部屋の中にノートを置いて、来館者の声を集めていたが、ある時その内容をまとめようとして愕然としたという。なぜならば、ノートに残された来館者の声からは、前回の展示のメッセージが全く伝わっていないように思われたからだそうだ。「なつかしい」、「くつろぐ」といった言葉が多く見られ、水の使い方やかつての不便な生活についての感想はほとんどなかった。しかし、本当にメッセージは伝わっていないのだろうか。

ノートに残された利用者の声の真実を調べるために、筆者が何人かのアルバイトと共に、実際に来館者がどのように「農村の暮らし」を受けとめているのかについて調査を行った。展示コーナーでの行動観察とインタビューを行った結果、ノートに記入された内容とは全く異なる結果が得られた。多くの来館者が、水などの資源の循環について何らかのメッセージを受け取っていたのである。

この違いにはいくつかの原因が考えられるが、一つは利用者の受け取り方を調べる方法の違い、一つは調査をした場所の特性である。まず、来館者の自主的な記入によるノートでは、積極的に声を残したい来館者が

つかまえることができる一方で、アトラダムに人において行おう直接インタビューでは、消極的な声をも拾うことができる。つぎに、ソートが座敷においてあったことから、記入者は当然周囲の生活用具などを触った後で記入をすることになり、そのハンズ・オン体験が反映されやすくなる。一方、展示コーナーを見終わった時点でインタビューを行うと、全体を振り返ることになり、単なるひとつのハンズ・オン体験に左右されずにコンセプトを答える可能性が高くなる。

結果として、大きなメッセージが割合多くの利用者に伝わっていたことがわかったが、直接的な「ハンズ・オン」には大きな魅力がある一方で、それゆえに全体の展示内容を一時的に曖昧にする要素があることは否定できないであろう。展示の場所は同じでも、方法によって結果が様々になりうることも、展示の効果を測ることの難しさを物語っている。

## ●「ハンズ・オン」と展示コミュニケーション

これらの事例の共通点は、何らかの形で「触れる」ことを想定した展示あるいはプログラムであることと、それがもたらした効果について調べようとしたことである。

結果としてわかったことは、特に「ハンズ・オン」を手法として用いる場合、直接的な印象がメッセージに勝ってしまうと、手法の方が強く記憶に残り、場合によっては全体をわかりにくくしてしまうことである。しかし逆に、手法と展示の内容が伝えるメッセージが一次的にはそれぞれ異なっても、うまくコーディネートすることで相補的に働く場合もあるということもいえるのではないかな。

「ハンズ・オン」に限らず、展示を議論するときはこのコミュニケーションの成立不成立については、決して無視できない。ただ、特に「ハンズ・オン」の場合は、いくつか落とし穴があるということだろうか。自己満足で終わらないためには、利用者の視点で考えることと、適切な調べ方を知ることが、まずは第一歩といえるだろう(\*4)。

## <註>

1) ティム・コルトン著、染川香澄ほか訳、『ハンズ・オンとこれからの博物館～インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営～』、東海大学出版会、2000

2) 琵琶湖博物館(編)、「文部省親しむ博物館づくり事業「漁師修行の旅」実施報告書」、2000

3) 展示およびデータの詳細は下記を参照。

・琵琶湖博物館研究調査報告第16号「生活再現の応用展示学的研究—博物館のエスノグラフィ—」、2000(印刷中)

4) 展示評価の手法については様々な書籍が海外で出ているが、下記にも概略が紹介されている。

・琵琶湖博物館研究調査報告書第17号「博物館を評価する視点」、2000

## 研究部会活動報告 1

## 制度問題

研究部会  
第14回研究会

## 演 題：「市立博物館の登録の実際－八千代市立郷土博物館の場合－」

日 時：平成12年6月17日（土）午後2時～5時

会 場：国立科学博物館 特別会議室

講 師：八木 康行氏（千葉県八千代市立郷土博物館 主査）

参加者：8名

## はじめに

制度問題研究部会としては、本年度は国内の博物館制度の実態の把握と海外の博物館制度について考察することとなっている。前回の研究部会では、海外の博物館制度を研究されている方々を招待し、英国の博物館制度の実状について理解を深めることができた。今回は、昨年度に実施した国内の博物館制度に関する事例に引き続き、八千代市立郷土博物館を事例として取り上げ、登録制度の実際について考察を深めることとした。

八千代市立郷土博物館は、平成12年4月1日に八千代市歴史民俗資料館から名称を変更し、同年5月15日に千葉県内37番目の登録博物館になった。そこでこの市立博物館の登録に関わりをもたれている八木康行氏をお招きし、その登録過程における諸問題の事例を紹介してもらい、引き続き参加者との協議を行った。

これより、八木氏による発表要旨を紹介する。

## 発表要旨

## 1 博物館登録と名称変更

八千代市立郷土博物館は平成5年に小学校の跡地を利用して八千代市歴史民俗資料館として開館した。その後、生涯学習社会への移行とともに、広く市民の学び場の提供が求められるようになり、当館はその中核的存在として事業の充実を図るべく努力をしてきたところである。こうしたなか、市民の高まる要望に応えることのできる幅広い事業展開を行うために、博物館法にいう登録博物館にすることが検討されてきた。また、登録に際し、生涯学習時代にふさわしい名称に変更することとなった。市民にアンケートを実施した結果、八千代市立郷土博物館に決定した。

表1 条例の変更点

| 原 案                                         | 修 正 案                                               | 修正の主な理由                         |
|---------------------------------------------|-----------------------------------------------------|---------------------------------|
| 博物館に次の課を置く。<br>庶務課<br>学芸課                   | 削除                                                  | 新しい課の設置は認めていない。                 |
| 博物館に館長及び学芸員のほか必要な職員を置く。                     | 博物館に館長その他必要な職員を置く。                                  | 幅広い人事交流ができるようにしたい。（補職名を増やしたくない） |
| 館長は次の各号のいずれかに該当するときは、入館を禁止し、又は退館を命ずることができる。 | 八千代市教育委員会は、次の各号のいずれかに該当するときは、入館を禁止し、又は退館を命ずることができる。 | 館長の権限とする根拠が不明である。               |

表2 規則の変更点

| 原 案                             | 修 正 案                                            | 修正の主な理由                                                               |
|---------------------------------|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 館長が特に必要と認めるときは、開館時間を変更することができる。 | 八千代市教育委員会が特に必要があると認めるときは、開館時間を変更することができる。        | 館長にそうした権限はない。博物館の設置者はあくまで教育委員会であり教育委員会が定めるものである。運用に際して決裁権を館長に委譲すればよい。 |
| 特別の事情により館長が休館を必要と認めた日。          | 教育委員会が特に必要があると認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。 |                                                                       |

## 2 条例・規則の制定過程

登録博物館になるには博物館法に基づいた市の条例制定が必要である。また、運用に際して教育委員会の施行規則も必要となる。条例案・規則案について市の例規審査会の過程で原案についていくつかの変更があった。(表1, 2 参照)。

## 3 今後に向けて

地方分権法が施行され、教育機関などに対する規制緩和が進むなかではあるが、機関長への権限は限られた範囲でしかないのが現状である。今後は学芸員の専門職としての位置づけや任用のあり方も含め博物館の社会的な認知度を上げていくことが肝要と考える。

後半は質疑応答という形で議論を続けた。

**【質問】**学芸員の記述のことが問題になったようだが、学芸員という言葉が条例に記載することで、かえって人事交流がとどまってしまうのではないか。

**【回答】**博物館として専門性の高い職員を確保するために必要であると考えた。ただ専門職としての学芸員が一つの館に固執しないでさまざまな館を経験し、見識を広めるような人事交流のできる環境づくりが必要である。

**【質問】**歴史民俗資料館を登録博物館にする理由は何か。

**【回答】**生涯学習社会の到来に伴う市民の要望に応えるためである。また、博物館とすることで、社会的にも認知され職員も誇りをもって働ける。

**【質問】**最近はこの博物館でも入館者が減る傾向にあるが、八千代市立郷土博物館の場合は入館者が増えているのはなぜか(図1 参照)。

**【回答】**職員の意識の変革が一つの理由である。それに伴い広報活動を活発化させ、講座や企画展などを通して市民への認知度を向上させた。また、学校の学習と連携した企画展を行い市内小学校の団体利用が増加したのが原因であろう。

**【質問】**館名決定の経過はよく分かった。市内に住むものとして館への順路がわかりにくいので、看板などを設けた方がよいと思う。

**【回答】**館としても看板設置などに向けて努力しているところである。

**【質問】**先日、図書館長について講演を聴いたが、その話の中で「今後図書館長は、市民にどのようにサービスを提供するかを考えることが重要になる。それは企業経営と同じような経営手段が必要になる。また地方分権の時代になり、経営責任も大きくなり、社会に対しての説明責任も増す」ということであった。こうした刺激的な話を聞いてきたので、市当局の対応を聞いてずいぶん違うと感じた。

**【回答】**まさにその通りで、同感である。地方分権の時代になり、国立科学博物館等も独立行政法人となり、経営の合理化はどうしても避けて通れない課題である。地方の博物館とて例外ではない。生涯学習機関として責任ある特色をもった経営をめざすべきであると考える。

本研究部会では、今後もこのような各博物館の抱える諸問題の把握に努め、国内における博物館制度の諸問題について実態を踏まえながら検討を加えていくとともに、さらに海外の博物館制度についても実例を交えながら考察を深めいくこととなった。

(国立科学博物館 小川 義和)

## 入館者数

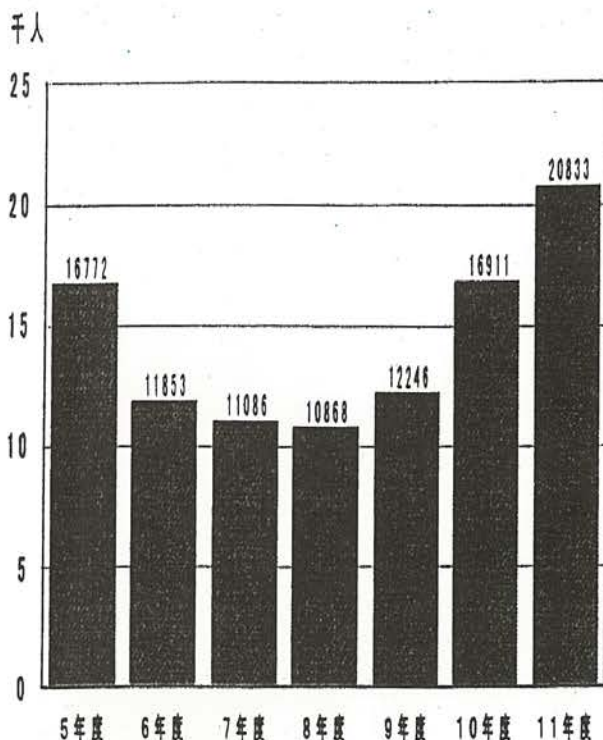


図1 八千代市立郷土博物館の入館者数の推移

## 研究部会活動報告 2

教育・  
コミュニケーション  
研究部会

## これからの教育・コミュニケーション研究部会について

教育・コミュニケーション研究部会は、平成11年度諸般の事情から研究部会を開催できなかった。研究課題としては、博物館活動の一つであるアウトリーチを考えていた。

アウトリーチは、博物館が博物館の外において、博物館に來ない人や來られない人々に対して行う博物館の活動である。最近、我が国において実施されるようになってきた生涯学習や総合的な学習などにおいて、今後、期待されている。

近年、米国において国家的事業として展開されてきた、インフォーマル・サイエンス・エデュケーション（I S E）プログラムにおける博物館、科学館などと学校との連携が着々と実績をあげ、効果を現してきている。このI S Eプログラムにおいて実効をあげているものとしては、博物館、科学館における参加型、体験型展示の新装、拡充などがある。また、博物館等における実験、実演、ワークショップ、映画会、講義、講演会など学校教育との連携は効果的であり、重要な活動である。

これらの諸活動の他に博物館から遠く離れた地域の人々に対するI S Eとして、例えば学校の体育館を使つての展示会、実験、実演、講義などのいわゆる出前活動は正にアウトリーチである。また、山や川や海や野原における自然観察、講義などのサイエンスキャンプもその一つである。また、博物館が持っている展示物や資料を地方の博物館に貸し出したり、巡回させて、地域の人々の啓蒙、学習に役立たせるといった移動博物館、移動展示、巡回展示などもアウトリーチの一つと言ってもよい。

特に科学技術においては理工離れが問題とされているところでもあり、一人でも多くの人々に科学技術への関心を持ってもらうために積極的に地域の人々に対して働きかけ、科学技術に目を向けてもらうことが重要である。そのために博物館としても来館者の増加を図ることは勿論、博物館から離れた地域に住む人々の為、その地域の学校等に博物館の職員が出かけて、教育、学習の機会を提供することは重要であり効果的である。

こういった動きは、科学技術の分野だけでなく、人々の文化レベルの向上のため、歴史、芸術への関心を高め、これらについての学習の機会を提供することも重要である。これも勿論アウトリーチ活動である。

これらの博物館活動としてのアウトリーチについて、どのような活動がどの程度おこなわれて、どのような効果を挙げているか実態を調査し、評価し、今後、将来におけるアウトリーチ活動の在り方、企画、実施について指針などを確立していくためにもこれについての調査・研究を進めていかなければと考えている。

平成12年度においては、近い将来に実施の運びとなる総合的な学習の時間における博物館の活用、連携問題について調査研究を進めている。会員諸氏の積極的参加を期待している。

（財団法人科学技術広報財団 倉本 昌昭）

# 支部会だより

## 北海道支部会 / 東北支部会

### －報告1－

#### 北海道支部設立幹事会を終えて

小樽市博物館 土屋 周三

6月26日(月)、札幌市において学会の北海道支部設立にともなう支部幹事会が開催された。当日は北海道各地から支部運営にご協力いただく16名の支部幹事中、11名が参集し、今後の支部活動、特に北海道という広範な地理的条件の中での学会活動を効果的に進めるには支部として何を行うべきか、何ができるかについて熱心な議論が交わされた。

現在、北海道の博物館園数は協会加盟館園だけでも200以上にのぼり、学芸員数も250を越える。

昨年、北海道博物館協会の学芸職員部会で設立20周年記念事業として取り組んでいた「北海道博物館ガイド」が刊行された。全道の学芸員が総力をあけて仕上げたこの冊子は博物館関係者のみならず、一般人にも好評を博しているが、この事業が成功した裏には北海道の学芸員どうしの横の繋がりの強さがある。学芸職員部会の設立当時は、市町村立の博物館園であっても学芸員の配置は誠に寂しい状況であり、ほとんどの館園が学芸員の単数配置であった。だからこそ北海道という広範な面積を有する地でありながら相互扶助意識が横の繋がりを生み強めてきた。そして現在、かつては単独学芸員として孤軍奮闘してきた館園も彼らの努力によって、学芸員の複数配置化が着実に進んでいる。それと同時に館園のマネジメント業務に関わらざるを得ない状況(年令)になってきた。あと10年～20年後、定年までの残年数を数える学芸員がいても悪くはないが、たぶん、館園の経営に関わる学芸員が必ず増えていくだろう。そうした予測は学芸員がマネジメントを勉強しなければならぬ時期であることを感じさせる。本学会はいままで加入していた学問分野別学会にはない魅力がある。学問分野別学会を縦軸とするなら本学会は、それを横断的に結んだ学会に見える。

北海道の博物館は歴史こそあれ、その姿にはまだまだ若さがある。それゆえに大いなる可能性を秘めている。北海道の博物館の未来を語れるような支部を目指したい。それも、ゆっくり、あせらず、出来ることから。全国の先輩諸氏、諸先生のご指導をいただきながら。

支部長：土屋周三(小樽市博物館)

副支部長：佐々木亨(北海道大学)

事務局長：河原洋介(乃村工藝社北海道支店)

幹事：青柳信克(旭川市博物館)

幹事：内田祐一(帯広百年記念館)

幹事：小林 敬(美幌町博物館)

幹事：笹倉いる美(北海道立北方民族博物館)

幹事：杉山光二(苫小牧市科学センター)

幹事：鶴丸俊明(札幌学院大学)

幹事：中島宏一(北海道開拓の村)

幹事：久野幸彦(丹青社札幌支店)

幹事：水野信太郎(北海道浅井学園大学)

幹事：三野紀雄(北海道開拓記念館)

幹事：矢島 睿(北海学園大学)

幹事：矢吹俊男(倶知安町小川原脩記念美術館)

幹事：米田秀喜(平取町立二風谷アイヌ文化博物館)

### －報告2－

#### 東北支部会発足にあたって

前沢町立牛の博物館 兼松 重任

みなさん。お知らせします。東北支部が立ち上がりましたよ。

**支部設立の背景：** 新幹線が、盛岡、秋田、山形まで伸びても、まだ東北地方は首都圏から遠い。日本ミュージアム・マネジメント学会(JMMA)は7つの研究部会を持っていて、それぞれ年数回の研究会をもっているから、国内に幾つかある博物館関係学協会の中で最も活性があると言ってもよい。研修の機会が多いことがJMMAの大きな魅力の一つではないだろうか。JMMA会員が首都圏に集中していることもあるが、各部会の研究会は東京で行われることが多い。せっかくの研修機会を東北の博物館関係者はあまり利用していないのが実情ではないか。首都圏の研究部会に出席できない理由を聞くと、旅費負担が大きい・職場の都合で出にくいなどであった。数100にのぼる東北6県の博物館園・関連企業のうち、JMMA会員は10数名しかいない。また地方では学会名が英語のカタカナ表現であることから、内容が役に立つものと判らないうちに敬遠される問題点もあった。

**支部設立の準備：** このような事情が大堀哲会長はじめ理事の方々にはわかり過ぎるくらい判っていたと思う。各支部長、幹事等を依頼し、地方に支部会を設置出来る

よう処置したのは、平成12年3月のJMMA理事会及び総会であった。東北地方には、支部設立について数ヶ月前から大堀会長や高橋事務局長から打診があった。これに対応して早速東北地方に在住するJMMA会員を名簿から拾い出した。幹事には連絡しておき、この大会終了直後に東北地方の出席者に集まっていたくよう掲示すると共にその旨をアナウンスしていただいた。東北支部設立準備委員会に集まったのは岩手県2名、宮城県1名、福島県3名であった。青森、秋田、山形の各県からは参加者はなかった。しかし集まった6名でとりあえず東北支部設立へ向けて準備を進めることで合意した。支部をどのような形にして、運営はどうしたらいいのか議論するたたき台として、JMMA会則にならって作成した支部会則(案)を審議した。このとき参考にしたのは数年前或る学会の東北支部長をした経験であった。その東北支部では評議委員会があり、会報を年2回刊行し、支部会費があり、学会賞まで出している。しかしJMMA東北支部はまだそんなことは無理だ。とにかく発足させようというのが全員の意見であった。首都圏で研究部会がやっているような研究会を東北地方で開けば、JMMAを知らない人も集まってくれるだろう。博物館運営に関する研修が容易になるだろう。JMMAの輪が東北地方に大きく広がるだろう。そのような明るい希望をみんなが持った。支部研究会を開くには講師が必要である。人材の多い首都圏から講師をよぶとすれば旅費・謝礼がかかる。活発な活動をしようとするれば十分な運営費が必要ではないかと考えた。予算は年額50,000円の支部助成金が受けられることを考慮しても、通信印刷費に消えてしまうのではないかと。支部を活性化するには支部会費を年1,000~2,000円はなければ、うまく運営は出来ないだろうという考えから年額1,000円の案にまとめた。東北支部の第1回大会は、東北の中心である宮城県がよいとの意見でまとめ、宮城県の幹事である東北歴史博物館(以下東北歴博と略す)の佐藤琴氏が第1回大会までの臨時事務局を引き受けていただくことになった。支部創立大会の開催期日は東北地方で温和な気持ちの良い季節になる6月、それも3日(土)が選ばれた。特別講演は2000年3月のJMMA第1回学会賞をうけた福島県の長島雄一氏に依頼した。支部会則案は今後の運営方針とも係わるため慎重に検討された。このとき大きな役割を果たしたのは福島県の佐々恵一氏であった。支部設立をするまでには予想外のハードルもあった。4月下旬に支部総会、幹事会、お知らせなどを準備するため東北歴博の佐藤氏に電話した。ところが「支部設立大会の準備はできません。」という返事で、晴天の霹靂であった。このままでは東北支部の設立は出来ないという事態になった。出来ない理由を聞くと「支部を勝手にやるな。早すぎる。」という高い所からの声があると上司から言われたとのことで、支部設立は重大な瀬戸際に立たされた。会長・事務局とは連絡を取り、手続きも踏んで準備しているのにと反省もしたが、胃が痛み、絶望的な思いにかられた。一晩悩んだ末にこれに負けてはいけないと有効な対策を次々にうった。その結果、佐藤氏は再び事務局として支部設立準備を再開するこ

とになったのである。問題の打開後に学会事務局には状況を報告した。このことは大堀会長にも伝わり、会長から「6月3日の東北支部の設立大会には出席します。」との励ましの言葉があった。苦しい時であっただけに希望と勇気がみなぎってきた。

佐藤氏から、JMMA東北支部の創立第1回大会の通知は数100館ある東北6県の博物館・園のうちどの範囲に郵送したら良いかという相談があった。結局、日本博物館協会会員名簿から登録博物館と博物館相当施設、それに含まれないが親しい館園を選び、開催通知、東北歴博の地図、学会加入申込書等を出していただいた。幹事の皆さんは標的をきめ電話やE-mailでの勧誘も行った。大堀会長には終始ご指導をいただき、支部会費は徴収しない方針で、支部会則ではなく内規あるいは申し合わせ事項程度にしてほしいとのご意向があった。その対応策として、講師旅費などの運営費が十分でなければ支部と研究部会との共催も考えられるのではないかと示唆をうけた。

支部設立大会当日には東北歴博の会場に思いがけなくも高橋信裕事務局長が真っ先に到着して待っているのを見て心は躍った。支部設立について、学会事務局とは密に連絡をとっていたからである。幹事会は東北各地からの参加を考慮して、開会を10:30からとし、昼食時まで利用して総会提出議案を審議した。会長のご意向にそって会則は内規に変え、支部会費もないことにした。佐藤琴氏は昼食会を中座して支部内規の修正文作成にあたった。東北支部結成に対する妨害行為は、かえって支部会員の結束を強める結果をもたらした。総会は青森市からの特急列車での参加者にも合わせて13:15に開会した。この支部大会に参集したのは東北各県等からの25名で、この日のことを聞きつけて参加した(株)ミューズの山下治子氏には感謝したい。支部長挨拶に引き続き、岡田茂弘東北歴博館長からご挨拶をいただいた。総会では1.支部内規、2.支部財務、3.活動方針、4.役員の選任、5.平成12年度事務局、6.その他、に関する案が採択された、役員には支部長、副支部長、幹事長、幹事及び監事で、役員の紹介が行われた。副支部長及び監事の選任は一任していただくことになった。総会終了後に大堀哲会長による特別講演「これからの日本ミュージアム・マネージメント学会の展望」が行われた。福島県教育庁文化課の長島雄一氏は『新しい博物館の姿を求めてー「出前授業」の実践を通して』と題して講演を行った。引き続いて館内を見学し、館内のレストランで東北支部設立の祝杯をあげた。ここには大堀会長、JMMA理事・元ミュージアムショップ部会長で秋田栗駒リゾート(株)の竹内則郎氏、山下治子氏も参加して、和やかな雰囲気の中で支部の将来像を語り合った。

おわりに: 今回の東北支部設立が果たした成果は、JMMAが東北地方に広がるきっかけとなり、会員増に結びついたこと。21世紀の生き残りをかけ、支部活動を通してお互いの情報交換が活発に行われ、地方の各館がますます活性化されることではないだろうか。

## 新刊紹介

### 「ミュージアムショップへ行こう！」

そのジャーナリスティック紀行

山下治子著

発行所：(株) ミュゼ

本体価格 1 6 0 0 円



本書を開くと冒頭に『ミュージアムショップから、風穴をあけるのだ！』の一文が目飛び込んでくる。『ミュージアムショップ』という言葉は、博物館関係者であつてもどの程度認知されているのだろうか。その意味でも、この『ミュージアムショップから風穴をあける』との著者の意気込みは重要になってくる。

博物館は、かつて「博物館行き」の言葉に象徴されたように、ある特定の人のための施設であり、一般の方々にはどこことなく敬遠されがちなところであつた。今もその雰囲気をかたくなに守っている施設も一部にはあるが。しかし、近年になつて、博物館のリニューアルが進み、また、日常的なテーマを扱った新たな博物館も登場するに至つて、博物館の存在がより身近に、そして、楽しみを持つて訪れることができる施設と変容してきている。その中で、今まで見向きもされなかつたこのミュージアムショップやレストラン、ホワイエ、そして建物の周囲（誘導路や外構植栽等）といった、とかく展示空間以外の空間として扱われてきた空間の重要性が見直されてもきている。

特に『ミュージアムショップ』は、単なる『売店』からの脱皮の必要性が言われてきているのである。本書の著者の山下氏は、『ミュージアムショップ』の本来の存在価値にいち早く気づき、『ミュゼ』の編集者として数多くの博物館取材した実績を有している。これらの蓄積が本書の中で紹介されているのであるが、その取材を通して、『ミュージアムショップ』が以前の『売店』から脱皮（というよりも『ミュージアムショップ』と『売店』とは全く異なる物とも言えるが）の必要性、必然性を文字通り肌で感じたのではないだろうか。

『ミュージアムショップ』となると、そこに置かれている商品（これを『ミュージアムグッズ』と言っているが）は、そのものの自体に意味が込められてくるの

である。今までの『売店』は、「利用者の便に供するためのもの」と言うのが設置の目的であつて、当然のように置かれているものは単なる商品であつたように思える。これが『ミュージアムグッズ』を扱うことにより、これらの『グッズ』が「持ち帰れる展示品」になるのである。

博物館は、「博物館行き」から「博物館発」に変わろうとしている。博物館を訪れる動機が曖昧であつても、博物館を出たときに何らかの興味や関心を持つことができる入館者を育てることが重要になっているのではないだろうか。これらの方々はその時抱いた興味や関心がきっかけとなつて、相乗的に新しい興味や関心に発展してくれるのではないかと考えたい。そのサポートをするのが博物館の役割の一つでもあつて、そのことが「博物館発」につながるのではないだろうか。これらの最初のきっかけを生み、持続させるにも「持ち帰れる展示品」である『ミュージアムグッズ』を扱う『ミュージアムショップ』の存在価値が大きいと著者は考えている。『ミュージアムショップ』は新たな展示空間と言えよう。

本書は4章構成になつてはいるが、そのほとんどが先にも紹介したように著者の取材に基づく実例を用いて綴られていることからどこから読みはじめても読める。中でも著者の本音が垣間見られる「P・S」コーナーが示唆にとんでいておもしろい。

『ミュージアムショップ』となると、とかく庶務関係者が担当する分野と思われがちであるが、「展示品」を扱う学芸員などのプロの専門家の方々にこそ是非考えていただきたい分野である。本書に紹介されている事例は、こうした専門家の方々に支えられているのがほとんどであるからである。

（評者 佐々 恵一

福島県在住）

# i n f o r m a t i o n

## ◆国際シンポジウムの内容をホームページでご覧になれます◆

5月に開催された「関西ミュージアム・メッセ2000」交流事業国際シンポジウムの内容が、ホームページでご覧になれます。同時に学会の活動や入会方法についてもご案内しておりますので、学会に興味のある方にもご紹介ください。

ホームページアドレス <http://www.hfp.co.jp/jmma/>

また、今後の学会ホームページ活動についても検討を進めています。会員の皆様がホームページに希望される機能や情報をぜひお寄せください。皆様のご意見ご要望を参考に、よりよいホームページを運営できるよう企画していきたいと考えております。

## ◆J MMA近畿支部事務局移転のお知らせ◆

J MMA近畿支部事務局を担当しております『(株)富士通ソーシアルサイエンスラボラトリ』が8月28日より下記の住所に移転致しました。移転により皆様にご迷惑をおかけすることもございますがよろしくお願い致します。尚、移転後6ヶ月間は、旧電話番号にご連絡いただいても新しい電話番号をご案内しております。

### 【新住所】

〒540-8514 大阪府大阪市中央区城見2-2-6 富士通関西システムラボラトリ2F  
(株)富士通ソーシアルサイエンスラボラトリ内 J MMA近畿支部事務局  
TEL 06-6920-5711 / FAX 06-6920-5712

## ◆研究部会に参加する際のお願い◆

各研究部会の研究会には、いつも奮ってご参加いただき、誠にありがとうございます。  
研究部会にご参加いただく際は、必ず事前にお申し込みしてからおいで下さい。事前に参加申し込みをされないで来られる方が多く、当日になってお席や配布資料の追加・調整を行うこととなり、会場提供者に迷惑をおかけすること度々です。当日参加を禁止するというものではありませんが、上記のようなトラブルをさけるため、皆様のご理解・ご協力をお願い申し上げます。

## ◆会報に掲載する投稿原稿を募集いたします◆

J MMA会報では、投稿原稿を募集しています。編集方針は以下の通りですので、原稿を投稿する方は事務局までお知らせください。

〈J MMA会報投稿原稿の考え方〉

- 1 原則として会員の未発表原稿を取り上げるものとしますが、事務局から会員及び会員以外の方に原稿を依頼することもあります。
- 2 投稿にあたっては、会報のどのコーナーに投稿するかを明記し、事務連絡表等で事務局まで申請してください。
- 3 原稿は、署名原稿として掲載します。
- 4 投稿された原稿については、編集委員会によって審査が行われ採否を決定します。また、修正等をお願いする場合もあります。
- 5 投稿原稿は採否にかかわらず、返却いたしません。

U O ! j e m i o j u !